

# 医学部附属医院

---

所属・職位	医学部附属病院 薬剤部・教授	
氏名	伊東 弘樹 (Itoh Hiroki)	
取得学位	博士(薬学)、熊本大学、2004年1月	
SDGs目標		

研究分野	医療薬学、臨床薬理学
研究キーワード	生理活性ペプチド、バイオマーカー、MR-proADM、AcSDKP、抗菌薬適正使用
研究内容	<p>1. MR-proADM濃度と腎不全時の降圧治療抵抗性および脂質異常症との関連性に関する研究          酵素免疫測定法および質量分析法を用いた血漿中MR-proADMの高感度測定法を開発し、慢性腎不全患者の血漿中MR-proADM濃度は健常人と比較して有意に高いことを示した。また、その濃度は生体腎移植後に急激に低下することを明らかとした。慢性腎不全患者において、降圧治療抵抗性と血漿中MR-proADM濃度の間に有意な正の相関が認められることを示し、MR-proADM濃度と脂質異常症との関連性を明らかとした。さらに、健常人における検討において、MR-proADM濃度は血管不全を反映する鋭敏なバイオマーカーであることを示した。</p> <p>2. N-acetyl-seryl-aspartyl-lysyl-proline (AcSDKP) 濃度と腎性貧血との関連性に関する研究          酵素免疫測定法による血漿中AcSDKPの高感度測定法を開発し、慢性腎不全患者の血漿中AcSDKP濃度は健常人と比較して有意に高いことを示した。また、その濃度は生体腎移植後に急激に低下することを明らかとした。さらに、慢性腎不全患者において、腎性貧血の合併の有無で、血漿中AcSDKP濃度に有意な違いが認められることを明らかとした。</p> <p>3. 抗感染症薬の適正使用（薬物動態および治療薬物モニタリング）に関する研究          発熱性好中球減少時におけるバンコマイシンおよびテイコブラニンの至適血中濃度を明らかとした。ポリコナゾールはCYP2C19遺伝子多型に基づく減量により、有効血中濃度到達率が高いこと、高濃度の持続時間が高いと肝障害の発症頻度が高いことを明らかとした。イトラコナゾールは活性代謝物の遊離型分率の方が低く、有効性と関連している可能性および未変化体の遊離型濃度が有害事象と関連している可能性を示した。ドリペネムおよびポリコナゾールの特殊病態下における薬物動態特性を明らかとした。さらに、多くの広域抗菌薬の高感度同時定量法を開発し、治療薬物モニタリングに応用可能であることを確認した。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>Koyama T, Kuriyama N, Suzuki Y, Saito S, Tanaka R, Iwao M, Tanaka M, Itoh H, et al. Sci Rep, 11, 305, 2021.</li> <li>Iwao M, Suzuki Y, Tanaka R, Koyama T, Ozaki E, Nakata T, Aoki K, Fukuda A, Sato Y, Kuriyama N, Fukunaga N, Sato F, Katagiri F, Ohno K, Shibata H, Mimata H, Itoh H. J Pharm Biomed Anal, 183, 113168, 2020.</li> <li>Suzuki Y, Katagiri F, Sato F, Fujioka T, Tanaka R, Sato Y, Mimata H, Itoh H. Clin Chim Acta, 453, 160-163, 2015.</li> <li>Suzuki Y, Itoh H, et al. Peptides, 48, 45-48, 2013.</li> <li>Suzuki Y, Itoh H, et al. Peptides, 43, 102-104, 2013.</li> <li>Suzuki Y, Itoh H, et al. J Pept Sci, 19, 59-63, 2013.</li> <li>Suzuki Y, Katagiri F, Sato F, Fujioka K, Sato Y, Fujioka T, Sato Y, Mimata H, Itoh H. Clin Lab., 62, 1323-1328, 2016.</li> <li>Suzuki Y, Katagiri F, Sato F, Fujioka K, Sato Y, Fujioka T, Sato Y, Mimata H, Itoh H. Biol Pharm Bull, 37, 1075-1079, 2014.</li> <li>Suzuki Y, Itoh H, et al. J Pept Sci, 18, 276-281, 2012.</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院 医療情報部・教授	
氏名	下村 剛 (Shimomura Tsuyoshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年6月	
SDGs目標		

**研究分野** 医療情報、救急領域のICT、MRI、災害医療

**研究キーワード** 医療情報ネットワーク、遠隔画像伝送システム、fMRI、MRS、災害医療

**研究内容**

- 医療情報ネットワーク：「うすき石仏ねっと」と総務省の提唱するクラウド型高度化EHR事業に参画し成果を上げている。また、このシステムを発展させて、おおいた医療ネットワークを現在構築中である。(論文1)
- 救急領域のICT：平成26年に大分県遠隔画像伝送システムを立ち上げ、平成29年には12誘導心電図伝送システム追加した。不必要な搬送の回避やDoor-to-balloon timeの短縮などの成果を上げている。令和3～4年にかけてシステム更新を行い、大分県下全消防本部とほぼすべての救急病院が参加する全国に例のないクラウド統合型救急支援システムを完成させる。(論文2) また、医療関係者間コミュニケーションアプリJoinを県下に導入して運営協議会を立ち上げ運営して、不必要な転院搬送の回避などで成果を上げている。
- MRIを用いた研究：MRIを用いたfMRI、MRS、GABA、DTI等の手法を用いた解析を行う技術を習得している。これらの解析方法を駆使して脳神経外科、精神科領域において様々な成果を上げている。令和3年よりヘルスケアAIデータサイエンス講座教授も兼務しており、AIを用いたデータ解析へと発展させていく。(論文3、4)
- 災害医療：大分大学災害対応研修の開催、BCP・BCMの策定を行っている。DMAT、医療救護班、災害医療コーディネーターとして、実災害で活動している。

様々な領域におけるICTの統合：医療情報、救急領域、MRI、災害医療等の幅広い領域で中心的役割を担っておりそこで得られた知見を基にICTの統合を目指している

**研究業績・アピールポイント**

論文

1. 平成30年、ID-Linkを利用したクラウド型高度化EHR事業と大分大学医学部附属病院との連携について. 第38回医療情報学連合大会プログラム・抄録集 307
2. 令和元年、遠隔画像伝送システムへのクラウド心電図機能の統合—地域中核病院参画による遠隔地への不要な搬送の回避—. 日本臨床救急医学会雑誌 2019年 22巻 5号 p. 671-679
3. 令和3年、Perfusion Parameter Obtained on 3-Tesla Magnetic Resonance Imaging and the Ki-67 Labeling Index Predict the Overall Survival of Glioblastoma. World Neurosurg. 2021 May;149:e469-e480.
4. 平成20年、Functional brain mapping during recitation of Buddhist scriptures and repetition of the Namu Amida Butsu: a study in experienced Japanese monks. Turk Neurosurg. 2008 Apr;18(2):134-41.

所属・職位	医学部附属病院 集中治療部・准教授	
氏名	糸永 一郎 (Itonaga Itiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	整形外科
研究キーワード	関節リウマチ、骨軟部腫瘍
研究内容	<p>●関節リウマチにおける骨破壊に関する研究</p> <p>関節リウマチにおける関節炎と関節破壊の機序において、特に関節滑膜でのサイトカインと破骨細胞形成および活性化による骨破壊のメカニズムについて研究する。</p> <p>●腫瘍における骨破壊に関する研究</p> <p>骨に発生する腫瘍による骨破壊機序を解明するため、腫瘍組織に存在する破骨細胞の特徴を調べ、破骨細胞形成に関与する腫瘍細胞の影響について研究する。</p> <p>関連リンク：<a href="https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000010295181/">https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000010295181/</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p><u><a href="#">Rheumatoid arthritis synovial macrophage-osteoclast differentiation is osteoprotegerin ligand-dependent.</a></u>  Itonaga I, Fujikawa Y, Sabokbar A, Murray DW, Athanasou NA. J Pathol. 2000 Sep;192(1):97-104. doi: 10.1002/1096-9896(2000)9999:9999&lt;::AID-PATH672&gt;3.0.CO;2-W. PMID: 10951406</p> <p><u><a href="#">Phenotypic characterization of mononuclear and multinucleated cells of giant cell reparative granuloma of small bones.</a></u>  Itonaga I, Schulze E, Burge PD, Gibbons CL, Ferguson D, Athanasou NA. J Pathol. 2002 Sep;198(1):30-6. doi: 10.1002/path.1184. PMID: 12210060</p> <p>●受賞</p> <p>1999年9月、British Orthopaedic Research Society, Best Poster Prize  2001年3月、Girdlestone Scholarship  2001年4月、日本リウマチ財団 欧州派遣研修医</p>

所属・職位	医学部附属病院 形成外科・准教授	
氏名	清水 史明 (Shimizu Fumiaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年6月	
SDGs目標		

研究分野	傷跡治療 同種間顔面移植 顔面神経麻痺治療
研究キーワード	瘢痕 ケロイド 顔面移植 顔面神経麻痺
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 傷跡評価用の診断アプリケーションの開発 JSW scar scaleを用いて、傷跡写真の傷跡の重症度を決定する。このデータを1000画像以上人工知能に学習させて、傷跡重症度評価用の人工知能の作成に取り組んでいる。</li> <li>・ ケロイドの治療法の開発 ラットを用いた瘢痕モデルを用いて、様々な薬剤にて瘢痕組織が改善するかどうかを観察して、傷跡治療に有効な薬効成分を調査する。</li> <li>・ 同種間顔面移植の基礎研究 動物実験にて同種間の皮膚を含んだ複合組織を移植して、その拒絶反応をコントロールする方法を研究している。</li> <li>・ 同種間顔面移植の臨床応用への研究 近年海外などで行われている人から人への顔面移植の本邦での手術方法やガイドライン作成を、学会、他大学と連携して行っている。</li> <li>・ 顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の臨床研究 顔面神経麻痺に対する新しい手術法を開発し、その成果を国内外に報告している。</li> <li>他</li> <li>・ 顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の基礎研究</li> <li>・ 末梢神経再建における人工神経の基礎研究</li> <li>・ 末梢神経再建における人工神経と幹細胞併用法の研究</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>関連文献</p> <p>Shimizu F, Okamoto O, Katagiri K, Fujiwara S, Wei FC. Prolonged ischemia increases severity of rejection in skin flap allotransplantation in rats. <i>Microsurg</i> 30: 132-137, 2010.</p> <p>Shimizu F, Ootari M, Uehara M, Takahashi Y, Kawano K, Effect of concurrent mental nerve reconstruction at the same time as mandibular reconstruction using a fibula osteoseptocutaneous flap. <i>J Plast Reconstr Aesthet Surg</i> 68(9): 1228-1234, 2015</p> <p>Shimizu F, Uehara M, Ootari M, Kusatsu M. Three-dimensional visualization of the human face using DICOM data and its application to facial contouring surgery using free anterolateral thigh flap transfer. <i>J Plast Reconstr Aesthet Surg</i> 69(1):e1-4., 2016</p>

所属・職位	医学部附属病院 手術部・准教授	
氏名	新宮 千尋 (Shingu Chihiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	周術期医学
研究キーワード	スピンメタボロミクス、周術期管理、医療経済
研究内容	<p>本研究は、NMRメタボロミクスとESRメタボロミクス（スピンメタボロミクス）により、周術期の合併症を予測、また発生時の病態の把握を行うための技術を確立することを目的としている。</p> <p>国家予算やGDPに対する医療費の割合の増加は年々増すばかりで、今後の加速する高齢化社会を考慮すると、逼迫した問題である。また、本国も米国並みの訴訟社会へと変貌してきており、手術の結果が少しでも患者や患者家族の意図にそぐわないものであると、医師が訴訟に巻き込まれる危険性も年々増加してきており、そのためにも手術前の患者の術前検査を簡単に省略できない状況にある。以上の状況より、NMRメタボロミクスとESRメタボロミクスを組み合わせたスピンメタボロミクスの測定系を確立することにより、周術期合併症をきたした患者と、経過に問題のなかった患者から採取した検体との比較・検討を経時的に行うことで、手術侵襲に伴う代謝物やフリーラジカルの変化を、網羅的に解析し、明らかにすることにより、周術期合併症の予測の基盤を築き、人的や財政的な医療資源の節約に貢献することを目的としている。</p> <p>現在のところ、健常人の血液と尿のサンプルの分析は、順調に進み、スピンメタボロミクスの正常パターンの傾向は概ね把握することに成功したため、合併症を有する術前患者における血液と尿のサンプルの採取に取りかかっている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>基盤研究 (C) (研究課題/領域番号: 20K09200、2020-2022) 研究代表者 周術期合併症に関する予測因子の基礎的検討-スピンメタボロミクスの臨床</p> <p>基盤研究 (C) (研究課題/領域番号: 15K10539、2015-2017) 研究代表者 スピンメタボロミクスに関する基礎的検討および臨床応用</p> <p>基盤研究 (C) (研究課題/領域番号: 20591808、2008-2010) 研究代表者 脳低体温療法施行時の患者重症度に関する研究-電子スピン共鳴法を用いた検討</p>

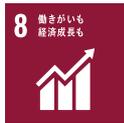
所属・職位	医学部附属病院 卒後臨床研修センター・准教授	
氏名	立山 香織 (Kaori Tateyama)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2017年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	耳鼻咽喉科学
研究キーワード	ANCA関連血管炎性中耳炎、自己免疫性中耳炎、耳科学
研究内容	<p>●ANCA関連血管炎における耳鼻咽喉病変の臨床的検討 ANCA関連血管炎は、ANCA（抗好中球細胞質抗体）を病態とする、稀な難治性自己免疫疾患である。鼻副鼻腔病変による鼻閉や鼻出血、耳病変による難聴や耳漏を主訴に耳鼻咽喉科を受診する機会が多い。疾患であるが、慢性副鼻腔炎や中耳炎などの感染症として長期間加療され、診断に難渋することも多く早期診断は容易でない。本研究の目的は、ANCA関連血管炎に伴う耳鼻咽喉病変の臨床的特徴を明らかにし早期診断に寄与することである。（論文1）</p> <p>●ANCA関連血管炎性中耳炎の早期診断法の確立 ANCA (Antineutrophil cytoplasmic antibody: 抗好中球細胞質抗体) 関連血管炎性中耳炎は、ANCA関連血管炎の初発または、経過中に続発する自己免疫性難治性中耳炎である。しばしばANCA関連血管炎発症の契機となるが中耳に限局した初期の段階では、血清診断で用いられるANCA値や組織学的所見が得られない場合も多く、早期診断が難しい。中耳貯留液中には血清中に存在しない自己抗体や、自己抗体の産生に関与している様々なサイトカインが存在していると考えられる。治療の過程で患者より採取した血清や中耳貯留液を用いて自己抗体やサイトカインの解析を行っている。中耳の病態解明によって、中耳貯留液を用いた早期診断法の確立や診断薬の開発を目指している。（論文4）</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <u>Tateyama K</u>, Umemoto S, Iwano S, *Hirano T, Suzuki M. Sinonasal manifestations of granulomatosis with polyangiitis: A retrospective analysis. <i>Auris Nasus Larynx</i>. 51 (4) :625-630, 2024</li> <li>2. <u>立山 香織</u>, 阿部 世史美, 藤永 真希, 伊東 和恵, 森山 宗仁, 平野 隆, 鈴木 正志. 頭頸部癌化学放射線療法中の摂食嚥下機能と栄養状態の推移. <i>嚥下医学</i>. 11 (2), 229-236, 2022</li> <li>3. <u>Tateyama K</u>, Hamada M, Kawano T, Kusaba T, Daa T, Suzuki M. Solitary fibrous tumor of the middle ear: Immunoexpression of NAB2-STAT6 fusion gene. <i>Otolaryngol. Case Rep</i>. 21:100345-100345. 2021</li> <li>4. <u>Tateyama K</u>, Kodama S, Kishibe K, Harabuchi Y, *Suzuki M. A novel strategy with combined assays for detection of anti-neutrophil cytoplasmic antibody (ANCA) in clinically ANCA-negative granulomatosis with polyangiitis patients. <i>Auris Nasus Larynx</i>. 44 (6) :735-741. 2017</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <u>立山香織</u>. 【知っておくべきアレルギー・免疫の知識】 ANCA関連血管炎性中耳炎の免疫病態. <i>ENTONI</i>, 292:11-16, 2024</li> <li>2. <u>立山 香織</u>. 【チャートでみる耳鼻咽喉科診療】 診断から治療へ 耳科領域 難治性中耳炎. <i>JOHNS</i>, 37:1041-1045, 2021</li> </ol> <p>●受賞</p> <p>2018年第24回日本耳科学会奨励賞 2022年大分大学医学部医師会奨励賞（若手支援・医学研究表彰） 2022年大分大学医学部附属病院卒後臨床研修センターベスト指導医賞</p>

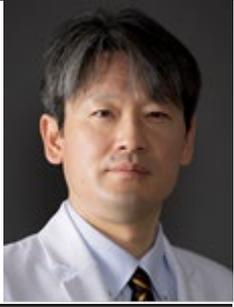
所属・職位	医学部附属病院 薬剤部・准教授	
氏名	田中 遼大 (Tanaka Ryota)	
取得学位	博士 (薬学)、熊本大学、2014年3月	
SDGs目標		

研究分野	医療薬学、薬物動態学、臨床薬理学
研究キーワード	抗感染症薬、アルブミン、タンパク結合、薬物動態、特殊病態、ファーマコメトリクス
研究内容	<p>●特殊病態における広域抗菌薬のPharmacometrics解析</p> <p>集中治療部 (ICU) 入室患者ではカルバペネム抗菌薬の血中濃度の個体差が大きく、一般病棟患者と異なる体内動態を示すことを明らかとした (論文1)。持続的腎代替療法 (CRRT) 施行の有無を考慮した母集団薬物動態解析を実施した結果、CRRTによるクリアランスを考慮した用法用量の調節の必要性を明らかとした (論文2)。経管投与時のポリコナゾールの吸着特性および薬物動態特性を明らかとした (論文3)。小児患者におけるバンコマイシンの薬物動態解析を実施した結果、発熱性好中球減少症時にはクリアランスが大きくなることで血中濃度が低値を示すこと、またその現象が幼児期で顕著であることを示した (論文4)。</p> <p>●広域抗菌・抗真菌薬の高感度同時測定系の開発とPK/PD解析への応用</p> <p>カルバペネム系抗菌薬、抗MRSA薬、ニューキノロン系抗菌薬、アゾール系抗真菌薬等のハイスルーブットな高感度同時定量法を新規に開発し、ICU患者や血液悪性疾患患者におけるPK/PD解析やTDM研究への臨床応用が可能であることを示した (論文5-7)</p> <p>●抗感染症薬の有害事象に関連した医療薬学研究</p> <p>リネゾリドの代表的な有害事象である血小板減少症と低ナトリウム血症の関連性を検討し、両因子のリスク因子を同定した (論文8-9)。</p> <p>●タンパク結合型抗微生物薬の遊離型分率変動要因解明とTDMへの応用</p> <p>イトラコナゾール及び活性代謝物の総・遊離型濃度の高感度同時定量法を確立し、生体内では活性代謝物の方が有効性に寄与している可能性を見出した (論文10, 11)。また、ダプトマイシンの総・遊離型濃度の同時定量法を確立し、腎不全時におけるタンパク結合率の変動要因を解明している (論文12, 13)</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Tanaka R, et al. Biol Pharm Bull. 2017;40(8):1226-1231.</li> <li>2. Nonoshita K, Suzuki Y, Tanaka R, et al. Sci Rep. 2020 Dec 17;10(1):22148.</li> <li>3. Tanaka R, et al. Biol Pharm Bull. 2021;44(5):737-741.</li> <li>4. Amano E, Tanaka R, et al. Ther Drug Monit. 2022, in press.</li> <li>5. Kai M, Tanaka R, et al. Clin. Biochem. 2021 Apr;90:40-49.</li> <li>6. Tanaka R, et al. J Pharm Biomed Anal. 2021 Feb 5;194:113764.</li> <li>7. Tanaka R, et al. Clin Biochem. 2022 Jan;99:87-96.</li> <li>8. Tanaka R, et al. Biol Pharm Bull. 2016;39(12):1968-1973.</li> <li>9. Tanaka R, et al. J Clin Pharm Ther. 2021 Apr;46(2):343-351.</li> <li>10. Suzuki Y, Tanaka R, et al. Clinical Biochemistry. 50(18):1228-1236, 2017.</li> <li>11. Tanaka R, et al. Clin Case Rep. 2021 Jan 14;9(3):1187-1192.</li> <li>12. Tanaka R, et al. Clin Biochem. 2020 Jul;81:20-26.</li> <li>13. Tanaka R, et al. J Pharm Biomed Anal. 2019 Feb 20;165:56-64.</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院 病理診断科・病理部・准教授	
氏名	西田 陽登 (Nishida Haruto)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	病理診断	
研究キーワード	形態学、腫瘍、遺伝子、皮膚	
研究内容	<p><b>・皮膚扁平上皮癌における腫瘍免疫療法および分子標的薬の適応についての研究</b></p> <p>皮膚扁平上皮癌(SCC)に対して、次世代シーケンサー(NGS)を用いた遺伝子の解析を行うことで、腫瘍発生を遺伝子学的に解明し、さらに、免疫染色を行って、腫瘍免疫とのかかわりを合わせて検討している。対象としては、臨床・病理学的に転移巣を確認できている症例を14例、転移巣のない症例を14例、計28例とした。それぞれに対してiSeq Hotpanel (Illumina社)の対象となっている50遺伝子を検索し、腫瘍免疫とのかかわりを検索するために、PD-L1、CD8の免疫染色を行っている。</p> <p><b>・間質性肺炎関連肺癌に関わるタンパクおよび遺伝子の検索</b></p> <p>肺扁平上皮癌(SCC)は、以前は喫煙関連のものが圧倒的に多かったものの、近年では間質性肺炎に関連した扁平上皮癌が増加しつつある。そこで、肺SCCに対して、次世代シーケンサー(NGS)を用いた遺伝子解析を行い、腫瘍発生に関連した遺伝子の解明を進めている。さらに、免疫染色を行って発現タンパクを確認することで、発現遺伝子との関連を検討している。</p> <p><b>・子宮・卵巣腫瘍における免疫染色の反応性の比較・検討</b></p> <p>子宮・卵巣腫瘍は組織学的に多彩であるが、いずれにも共通して発生する腫瘍があり、代表的なものとして類内膜癌や明細胞癌がある。腫瘍の発生部位としては近いものの、それらの腫瘍についての異同の議論はなされていない。子宮・卵巣腫瘍の類内膜癌と明細胞癌に対して免疫染色にて発現タンパクを解析し、そのパターンにより組織学的な異同を検索するとともに、腫瘍発生や予後との関連を検討している。それによって予後と関連のあるタンパクの発見や新たな治療法の開発に結び付けたい。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>Nishida H, Kondo Y, Kusaba T, Kadowaki H, Daa T. Immunohistochemical Reactivity of Prostate-Specific Membrane Antigen in Salivary Gland Tumors. Head Neck Pathol. 2021 Aug 21. Epub ahead of print.</p> <p>Goto K, Kukita Y, Honma K, Ogawa K, Nishida H, Takai T, Oishi T, Hishima T, Tanaka M, Isei T. Signet-ring cell/histiocytoid carcinoma of the axilla: a clinicopathological and genetic analysis of 11 cases, review of the literature, and comparison with potentially related tumours. Histopathology. 2021 Dec;79(6):926-939.</p> <p>Kawashima T, Umeno T, Terazawa T, Wada T, Shuto T, Nishida H, Anai H, Nakayama Y, Miyamoto S. Aortic valve neocuspidization with in-body tissue-engineered autologous membranes: preliminary results in a long-term goat model. Interact Cardiovasc Thorac Surg. 2021 May 27;32(6):969-977.</p>	

所属・職位	医学部附属病院 放射線部・准教授	
氏名	本郷 哲央 (Hongo Norio)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2007年12月	
SDGs目標	  	

研究分野	画像診断 血管内治療 画像下治療 Interventional Radiology
研究キーワード	腹部画像診断 CT,MRI 大動脈ステントグラフト 経皮的血管形成術
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>大動脈血管内治療に関する研究 胸部, 腹部大動脈瘤に対するステントグラフトを主体とした血管内治療の有効性, 安全性向上, 適応の拡大に関する研究 とくに <ul style="list-style-type: none"> <li>・分枝再建を伴うステントグラフト治療 (資料5, 6)</li> <li>・エンドリークに対する予防, 制御 (資料4, 7)</li> <li>・安全性向上に対する試み</li> </ul> </li> <li>血管に於ける画像を用いた新たな低侵襲治療法や器具の開発 Interventional Radiology (画像下治療) における低侵襲治療法に資するカバードステント, 塞栓デバイス, 塞栓法の開発 (資料1, 3)</li> <li>Dual energy CT, MRIを用いた大動脈画像診断法に関する研究 大動脈血管内治療における術前, 術後の画像診断, とくにエンドリークの診断法の開発 (資料2)</li> </ol>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 科学研究費助成事業 研究代表者 本郷 哲央 研究期間 (年度)2019 -2022 盤研究(C) ナノ炭素複合素材と電界紡糸技術を用いた高生体適合性細径カバードステントの開発</li> <li>2) 科学研究費助成事業 研究代表者 本郷 哲央 研究期間 (年度)2014 -2016 基盤研究(C) Dual energyと超遅延相造影CTによる4次元CT血管造影エンドリーク診断</li> <li>3) Hongo, N. et al.:Vessel Occlusion using Hydrogel-Coated versus Nonhydrogel Embolization Coils in Peripheral Arterial Applications: A Prospective, Multicenter, Randomized Trial. J Vasc Interv Radiol 32:602-609 e601, 2021.</li> <li>4) Hongo, N. et al.:Sac Expansion with Vasa Vasorum-Related Type II Endoleak after Endovascular Aortic Repair Managed by Translumbar Direct Sac Embolization Using Glue. Interventional Radiology 4:27-31, 2019.</li> <li>5) Hongo, N. et al.:Back Table Modification of Bifurcated Endurant Stent Graft to Aorto-Uni-Iliac Stent Graft to Treat Chronic Failure of Endovascular Abdominal Aortic Repair (EVAR) for Abdominal Aortic Aneurysm. Interventional Radiology 1:18-20, 2016.</li> <li>6) Hongo, N. et al.: "Squid-capture" modified in situ stent-graft fenestration technique for aortic arch aneurysm repair. Cardiovasc Intervent Radiol 37:1093-1098, 2014.</li> <li>7) Hongo, N. et al.:Double coaxial microcatheter technique for transarterial aneurysm sac embolization of type II endoleaks after endovascular abdominal aortic repair. J Vasc Interv Radiol 25:709-716, 2014.</li> </ol>

所属・職位	医学部医学科消化器・小児外科学講座・講師	
氏名	赤木 智徳 (Akagi Tomonori)	
取得学位	博士(医学)、大分医科大学、2012年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	消化器外科学、内視鏡外科学、腫瘍生物学	
研究キーワード	低侵襲手術、集学的治療開発、ビッグデータ、癌治療	
研究内容	<p>●大腸癌の新規予後規定遺伝子同定に関する研究          進行大腸癌のリンパ節転移に関連する新規遺伝子をマイクロアレイ解析にてVSNL-1遺伝子を同定、臨床データより予後規定因子であることを報告した (Akagi T. et al. Int J Ca 2012)。</p> <p>●日本内視鏡外科学会技術認定医制度の有用性に関する研究 (ビッグデータ研究)          執刀医が日本内視鏡外科学会技術認定取得者であれば短期成績の改善に寄与できるか検討した (腹腔鏡下低位前方切除症例41,239例、幽門側胃切除症例50,654例)。多変量解析より技術認定取得者執刀群は、縫合不全改善に寄与する因子であった。日本内視鏡外科学会技術認定取得者の手術施行は、縫合不全改善に寄与したことから、技術認定制度は合併症軽減に有用と報告。(Akagi T. et al. Ann Gastroenterol Surg 2020)。</p> <p>●左側大腸における左結腸動脈温存術式に関する研究          左側大腸癌に対する左結腸温存リンパ節郭清の意義を短期・長期成績で非温存郭清と比較検討し、温存術式での妥当性を報告した (Akagi T. et al. Ann Gastroenterol Surg 2020)。</p> <p>●COVID-19感染拡大が及ぼす内視鏡下手術への影響 (ビッグデータ研究)          COVID-19感染拡大が内視鏡手術に与えた影響をNational Clinical Databaseを利用して調べた後ろ向き研究である。幽門側胃切除術、低位前方切除術に対し、2020年の実施状況を2018年、2019年と比較し、手術件数の変化および手術成績を解析した。手術件数では、腹腔鏡下幽門側胃切除術、腹腔鏡下低位前方切除術は前年度に比べ減少していたが、術後合併症および死亡率は前年と変わりなかった。COVID-19感染拡大により内視鏡手術件数は減少したものの、安全に行われていることを報告した (Akagi T. et al. Ann Gastroenterol Surg 2023)。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022年、Akagi T, et, al. Laparoscopic versus open resection for stage II/III rectal cancer in obese patients: A multicenter propensity score-based analysis of short- and long-term outcomes. Ann Gastroenterol Surg. 2022 Jul 16;7(1):71-80.</li> <li>2022年、Akagi T, et, al. Success rate of acquiring informed consent and barriers to participation in a randomized controlled trial of laparoscopic versus open surgery for non-curative stage IV colon cancer in Japan (JCOG1107). Jpn J Clin Oncol. 2022 Nov 3;52(11):1270-1275.</li> <li>2020年、Akagi T, Akagi T, et, al.. Preoperative chemoradiotherapy versus surgery alone for advanced low rectal cancer: a large multicenter cohort study in Japan. Surg Today. 2020</li> </ol>	

所属・職位	医学部医学科脳神経外科学講座・講師	
氏名	阿南 光洋 (ANAN Mitsuhiro)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		

研究分野	脳神経外科学
研究キーワード	脳卒中、遺伝子、脳機能、免疫
研究内容	<p>●脳卒中に関する基礎研究、臨床研究(業績2, 3, 4, 5, 7, 8) 脳梗塞や脳出血、くも膜下出血など脳血管障害の機序や病態を解明する。</p> <p>●脳腫瘍に関する基礎研究(業績1, 6) 脳腫瘍の遺伝子解析など。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://researchmap.jp/read0207325">https://researchmap.jp/read0207325</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <u>Anan M</u>, Del Maestro RF, Hata N, Fujiki M. O<sup>6</sup>-methylguanine methyltransferase promoter methylation status of glioblastoma cell line clonal population. <i>Neuropathology</i>. 2023 Jun 29. doi: 10.1111/neup.12931.</li> <li>2. <u>Anan M</u>, Nagai Y, Matsuda T, Morimoto K, Fujiki M. Partially thrombosed middle cerebral artery-lenticulostriate artery aneurysm with native radiological examinations suggesting proximal lenticulostriate artery aneurysm: A case report. <i>Surg Neurol Int</i>. 2021 Aug 3;12:389. doi: 10.25259/SNI_597_2021.</li> <li>3. <u>Anan M</u>, Nagai Y, Matsuda T, Fujiki M. Trauma may affect vasa vasorum to promote thrombosis and enlargement of intracranial aneurysms: A case report. <i>Surg Neurol Int</i>. 2021 Jan 13;12:16. doi: 10.25259/SNI_750_2020.</li> <li>4. <u>Anan M</u>, Nagai Y, Fudaba H, Fujiki M. Lactate and Lactate Dehydrogenase in Cistern as Biomarkers of Early Brain Injury and Delayed Cerebral Ischemia of Subarachnoid Hemorrhage. <i>J Stroke Cerebrovasc Dis</i>. 2020 May;29(5):104765. doi: 10.1016/j.jstrokecerebrovasdis.2020.104765.</li> <li>5. <u>Anan M</u>, Nagai Y, Fudaba H, et al. Third nerve palsy caused by compression of the posterior communicating artery aneurysm does not depend on the size of the aneurysm, but on the distance between the ICA and the anterior-posterior clinoid process. <i>Clin Neurol Neurosurg</i>. 2014 Aug;123:169-73. doi: 10.1016/j.clineuro.2014.05.006. Epub 2014 Jun 4.</li> <li>6. <u>Anan M</u>, Inoue R, Ishii K, et al. A rosette-forming glioneuronal tumor of the spinal cord: the first case of a rosette-forming glioneuronal tumor originating from the spinal cord. <i>Hum Pathol</i>. 2009 Jun;40(6):898-901. doi: 10.1016/j.humpath.2008.11.010. Epub 2009 Mar 9.</li> <li>7. <u>Anan M</u>, Abe T, Shimotaka K, et al. Induction of collateral circulation by hypoxia-inducible factor 1alpha decreased cerebral infarction in the rat. <i>Neurol Res</i>. 2009 Nov;31(9):917-22. doi: 10.1179/174313209X383231. Epub 2009 Jan 9.</li> <li>8. <u>Anan M</u>, Abe T, Matsuda T, et al. Induced angiogenesis under cerebral ischemia by cyclooxygenase 2 and hypoxia-inducible factor naked DNA in a rat indirect-bypass model. <i>Neurosci Lett</i>. 2006 Dec 1;409(2):118-23. doi: 10.1016/j.neulet.2006.09.039. Epub 2006 Oct 17</li> </ol>

所属・職位	医学部医学科 腎泌尿器外科学・講師		
氏名	井上 享 (Toru Inoue)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2012年9月		
SDGs目標	 	リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください	
研究分野	泌尿器科学		
研究キーワード	泌尿器悪性腫瘍、透析、腎臓がん		
研究内容	<p>●透析患者の腎臓がんのゲノム異常に関する研究                  長期透析患者を含むゲノム異常について、アレイCGHを用いて解析した。多施設からの症例を集積し、透析患者のゲノム異常は大きく2つに分かれることを解明した。                  また、後天性嚢胞関連腎がんや淡明乳頭状腎がんの組織型ごとのゲノム異常を明らかにした。                  (論文1)                  その他にも主に非淡明細胞腎がんに対する解明を試みている。</p> <p>●前立腺がんにおけるMRI検査を基軸とした診断ストラテジーを報告した。(論文2)</p> <p>●COVID-19禍における維持透析患者の食生活習慣の変化などにつき解析、報告した。(論文3)</p>		
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2012年、Genomic profiling of renal cell carcinoma in patients with end-stage renal disease. <u>Inoue T</u>, Cancer Sci.</li> <li>2023年、Current magnetic resonance imaging-based diagnostic strategies for prostate cancer <u>Inoue T</u>, IJU</li> <li>2024年、Association Between Dietary Habit Changes and COVID-19 Prophylaxis During the Pandemic Among Japanese Maintenance Hemodialysis Patients, <u>Inoue T</u> Cureus</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2013年、第3回大分大学医学部中塚医学賞 生命科学・基礎医学専門分野</li> <li>2012年、第101回九州泌尿器科連合地方会学術集会 最優秀発表賞</li> </ol>		

所属・職位	医学部附属病院 小児科・講師	
氏名	井上 真紀 (Inoue Masanori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年6月	
SDGs目標		
研究分野	人類遺伝学、新生児学	
研究キーワード	臨床遺伝学、周産期医学、先天代謝異常症、疾患モデル動物	
研究内容	<p>● 乳児肝不全症候群1型における病態分子機構の解明</p> <p>LARS1遺伝子の病的バリエーションにより発症する乳児肝不全症候群1型について、<i>larsb</i>遺伝子ノックアウトゼブラフィッシュを用いて解析し、その病態に過剰なオートファジーの亢進が関与することを報告した (論文1)。さらなる病態解明を目的とし、乳児肝不全症候群1型患者と同様のLARS1遺伝子点変異を導入したノックイン動物モデルを作製し解析を行っている。</p> <p>● 橋小脳低形成10型における病態分子機構の解明</p> <p>RNA代謝関連分子であるCLP1の異常により発症する橋小脳低形成10型について、ゼブラフィッシュを用いて解析し、RNA代謝異常により蓄積する複数のRNA断片の中から病的RNA断端を同定し報告した (論文2)。</p> <p>● 新生児感染症の網羅的検索と臨床症状との比較</p> <p>NICUに入院を要する新生児を対象に、一般的な感染症検査では同定困難な病原体について multiplex real-time PCR法を用いた新生児感染症の網羅的解析を行い、周産期の経過や臨床症状との関連について解析を実施している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>CRISPR/Cas9システムを独自に改変した作製法を用いて、本附属病院にて同定された小児希少遺伝性疾患と同様の病的バリエーションを有するノックイン動物モデルの作製を行い、病態分子機構の解析を実施している。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、Inoue M, et al. Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <b>Scientific Reports</b>.</li> <li>2020年、Inoue M, et al. Tyrosine pre-transfer RNA fragments are linked to p53-dependent neuronal cell death via PKM2. <b>Biochem Biophys Res Commun</b>.</li> </ol> <p>●競争的研究助成金</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022年度～2024年度、科研費若手研究「乳児肝不全症候群1型における乳児期重症化と発熱時増悪因子の解明 (課題番号：22K15947)」研究代表者</li> <li>2019年度～2021年度、科研費若手研究「遺伝性神経変性疾患に認めるtRNA由来small RNAの生理的・病理的意義の解明 (課題番号：19K17366)」研究代表者</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2021年、第62回日本先天代謝異常学会学術集会 若手優秀演題賞 「ロイシルtRNA合成酵素欠損ゼブラフィッシュを用いた乳児肝不全症候群の病態解明」</li> </ol>	

所属・職位	医学部附属病院麻酔科・講師	
氏名	内野 哲哉 (Uchino Tetsuya)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2022年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	麻酔科学
研究キーワード	末梢神経、末梢動脈、中心静脈、カテーテル留置、末梢神経ブロック
研究内容	<p>安全な血管カテーテル留置や神経ブロックに関する臨床解剖学的研究を行っている。</p> <p>①安全な中心静脈カテーテル留置や動脈カテーテル留置の際に重要な局所解剖学に。特に末梢静脈ルート確保時や橈骨動脈カテーテル留置時に問題となるSuperficial radial arteryの臨床解剖学的特徴についての検討。</p> <p>②臨床解剖学からみた各種神経ブロックにおける局所解剖学および臨床研究。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Use of epidurography and computed tomography to identify misplacement of a section of an epidural catheter in the subarachnoid space. J Clin Anesth 2018;46:1-2.</li> <li>2. Superficial Radial Artery Accidentally Identified Using the Mill Suss Wrist Vascular Visualized Device. J Cardiothorac Vasc Anesth 2019;33:3526-3527.</li> <li>3. Comparison of three obturator nerve block techniques for injectate spread into the obturator canal: a randomized controlled trial. J Anesth 2022;36:383-389.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2013年5月 第60回日本麻酔科学会 最優秀演題賞受賞 閉鎖神経ブロックにおける副閉鎖神経の臨床的意義—臨床解剖学的検討—</li> <li>2. 2019年4月 第6回日本区域麻酔学会 最優秀演題賞受賞 各種閉鎖神経ブロック法における閉鎖管到達度の検討と閉鎖管内注入の意義</li> <li>3. 2020年10月 第7回日本区域麻酔学会 最優秀演題賞受賞 内転筋管ブロック法はアプローチ部位にかかわらず筋枝には膝知覚成分を含む—臨床解剖学的検討</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院 消化器内科・講師	
氏名	遠藤 美月 (Endo Mizuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標		

研究分野	肝臓
研究キーワード	ウイルス性肝炎 肝がん 肝線維化
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 肝炎ウイルス排除達成を目指した研究 WHOは、2030年までに公衆衛生上の脅威としての肝炎ウイルス排除達成を目指すことを目標として掲げている。C型肝炎はウイルス排除薬の進歩により、治癒可能な疾患となったが、いまだ専門医受診に結びつかず治療までたどり着けない患者が存在する。病院で検査を行ったC型肝炎ウイルス抗体陽性者を確実に拾い上げ、専門医受診につなげるシステムを構築しその効果を検討した。</li> <li>● 肝癌治療に関する研究 切除不能な肝細胞癌に対する治療薬が続々と登場している。分子標的薬であるレンバチニブは奏効率が高く有効な治療であるが、副作用により中止・減薬されることも稀ではない。レンバチニブの副作用の一つに血小板減少があるが、レンバチニブの血中濃度が血小板減少を予測しうるか研究した (論文1.) 検討の結果、Cmaxと血小板減少率に有意な相関を認め、Cmaxはレンバチニブによる初期の血小板減少の予測に有用であることを証明した。</li> <li>● 肝線維化に関する研究 肝疾患患者の予後において、肝線維化進展度を評価することは非常に重要である。非侵襲的肝線維化診断であるFib4 index、超音波エラストグラフィに関して、生検診断と比較した診断能について検討した。またFib4 indexを用いた糖尿病患者の肝発がん高リスク群を囲い込みの検討を行った。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>1. 2021年、Maximum Plasma Concentration of Lenvatinib Is Useful for Predicting Thrombocytopenia in Patients Treated for Hepatocellular Carcinoma. Endo M, Honda K, Saito T, Shiraiwa K, Sueshige Y, Tokumaru T, Iwao M, Tokoro M, Arakawa M, Tanaka R, Tatsuta R, Seike M, Itoh H, Murakami K. World J Oncol.</p> <p>著書</p> <p>1. 2019年、糖尿病合併NAFLD/NASH診療—糖尿病内科と肝臓内科の連携—肝臓内科サイドから—肝臓クリニカルアップデート (特集 NAFLD/NASH診療の諸問題).vol.5,No.2 183-187</p>

所属・職位	医学部附属病院 集中治療部・講師	
氏名	大地 嘉史 (OHCHI YOSHIFUMI)	
取得学位	博士(医学), 大分大学, 2019年3月	
SDGs 目標	 <p>3 すべての人に健康と福祉を</p>	

研究分野	集中治療医学
研究キーワード	人工臓器, 急性血液浄化, 敗血症, 急性腎障害
研究内容	<p>●周術期の急性腎障害における新規腎バイオマーカーに関する研究 集中治療患者は高頻度に急性腎障害(AKI)を合併する。しかしながら, AKIの診断に使用される血清クレアチニンまたは尿量の診断精度は高くなく, 理想的な診断方法が無いのが現状である。マイクロRNAのひとつであるmiR-210は, 腎尿細管の増殖に関与することが知られており, AKIの診断および回復過程を評価するバイオマーカーとしての有用性が期待される。当教室ではmiR-210とAKIの関連性を評価し診断ツールとしての有用性を研究している。(科学研究費助成事業課題番号24K19495)。</p> <p>●急性呼吸不全に対する呼吸補助デバイスに関する臨床評価 急性呼吸不全患者の気管挿管の回避もしくは抜管後呼吸不全の予防を目的に非侵襲的な呼吸補助デバイスが有効とされている。代表的なものとして非侵襲的換気(NIV: Noninvasive Ventilation)や高流量鼻カニューラ酸素療法(HFNT: High Flow Nasal Therapy) が用いられているが, NIVは忍容性(快適性)の低さ, HFNTは忍容性は優れるが呼吸補助効果の低さが問題となっている。我々は慢性期に主に使用され長期使用に優れたネーザルピロータイプのNIV(以下NP-NIV)の有用性に着目し, 急性期での使用でもNP-NIVはHFNTと比較して有意に呼吸補助能が優れており, かつ装着の忍容性は同等であることを見出した(Ohchi Y, Kuribayashi Y, Makino T, Yasuda N, Kitano T. Nasal pillow noninvasive ventilation versus high-flow nasal therapy after extubation in surgical intensive care patients: A propensity-matched cohort study. J Int Med Res. 2022;50(7):3000605221112777.)。急性期の呼吸補助デバイスの臨床効果とメカニズムの解析を行い, 最終的には新規の急性期に有用な非侵襲デバイス(インターフェイス)の開発に繋げていく予定である。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>集中治療専門医として重症患者管理の臨床及び基礎研究に取り組んでいる。集中治療患者の多くが多臓器不全を呈しており様々な臓器補助手段を必要とすることから, 急性血液浄化や人工呼吸, 膜型人工肺といった臓器補助装置を研究テーマとしている (Ther Apher Dial, 23(2):173-179, 2019, 人工呼吸, 37:236-7, 2020, 他)。</p> <p>さらに, 様々な治療薬物が臓器補助装置に影響を受けることから, 臓器補助装置使用時の薬力学・薬物動態について当院薬剤部との共同研究を進めている (J Pharm Biomed Anal. 113764, 2020, Clin Biochem. 90:40-9, 2021, 他)。</p>

所属・職位	医学部附属病院 腫瘍センター・講師	
氏名	大津 智 (Otsu Satoshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2006年3月	
SDGs目標		

**研究分野** がんの薬物療法開発

**研究キーワード** がん薬物療法

**研究内容** JCOG2004:切除不能進行・再発大腸癌に対する二次化学療法におけるFOLFIRI療法と併用するVEGF阻害薬 (ベバシズマブ、ラムシルマブ、アフリベルセプト) の選択に有用なバイオマーカーを探索するランダム化第II相試験

・研究の目的  
 切除不能進行・再発大腸癌における二次化学療法の標準治療であるベバシズマブ (BEV) + 5-FU+ロイコボリン+イリノテカン (FOLFIRI) 療法 (BEV併用FOLFIRI療法) に対して、試験治療であるラムシルマブ (RAM) + FOLFIRI療法 (RAM併用FOLFIRI療法)、アフリベルセプトベータ (AFL) + FOLFIRI療法 (AFL併用FOLFIRI療法) をランダム化し、治療法を選択に有効な効果予測因子となるバイオマーカーを探索する。  
 また、効果予測因子となるバイオマーカーが判明した場合には、BEV併用FOLFIRI療法に対してRAM併用FOLFIRI療法、AFL併用FOLFIRI療法の有効性が期待される集団を抽出し、次期第III相試験の対象を設定する。



・研究者の役割：研究事務局 (プロトコール作成、試験のマネージメント、遂行)

そのほか参加中の臨床試験

- ・ JCOG1213, JCOG1314, JCOG1503C, JCOG1510, JCOG1904, JCOG2014 等

**研究業績・アピールポイント**

- Phase 1 Trial of Avelumab (anti-PD-L1) in Japanese Patients With Advanced Solid Tumors, Including Dose Expansion in Patients With Gastric or Gastroesophageal Junction Cancer: The JAVELIN Solid Tumor JPN Trial  
 Toshihiko Doi , Satoru Iwasa , Kei Muro , Taroh Satoh , Shuichi Hironaka , Taito Esaki , Tomohiro Nishina , Hiroki Hara , Nozomu Machida , Yoshito Komatsu , Yasuhiro Shimada , Satoshi Otsu , Shin Shimizu , Morihiko Watanabe  
 Gastric Cancer, 22 (4), 817-827 Jul 2019
- Phase II Trial of Aflibercept With FOLFIRI as a Second-Line Treatment for Japanese Patients With Metastatic Colorectal Cancer  
 Tadachichi Denda , Daisuke Sakai , Tetsuya Hamaguchi , Naotoshi Sugimoto , Takashi Ura , Kentaro Yamazaki , Hirofumi Fujii , Takeshi Kajiwara , Takako Eguchi Nakajima , Shin Takahashi , Satoshi Otsu , Yoshito Komatsu , Fumio Nagashima , Toshikazu Moriwaki , Taito Esaki , Takeo Sato , Michio Itabashi , Eiji Oki , Toru Sasaki , Yoshinori Sunaga , Samira Ziti-Ljajic , Claire Brillac , Takayuki Yoshino  
 Cancer Sci, 110 (3), 1032-1043 Mar 2019

所属・職位	医学部 麻酔学 講師	
氏名	小山 淑正 (Oyama Yoshimasa)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs 目標		

研究分野	麻酔学、集中治療医学
研究キーワード	概日リズム、敗血症、炎症、麻酔、集中治療
研究内容	<p>●<b>概日リズムと炎症制御方法の研究</b></p> <p>概日リズムは、覚醒、ホルモン分泌、認知などの生理的機能を調整しており、生体の恒常性維持に欠かせないものである。概日リズムの乱れは高血圧、糖尿病、心筋梗塞発症といった炎症性疾患に影響を与えるだけでなく、炎症性疾患自体が概日リズムを乱し、病態を悪化させるといった悪循環を形成することが知られている。</p> <p>概日リズムの是正により、いかに病態改善できるかを主な研究テーマとして取り組んでいる。</p> <p>●<b>麻酔薬が概日リズムや認知機能に及ぼす影響の研究</b></p> <p>手術や集中治療で用いられる麻酔薬は概日リズムに影響を与える事が知られており、手術後や集中治療後の認知機能障害の原因の一つであると考えられている。本研究では、麻酔薬が認知機能に与える影響とその機序を解明し、認知機能障害発症を予防する新たな治療戦略の創出を目的としている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Oyama Y</b>, Shuff SR, Burns N, Vohwinkel CU, Eckle T. Intense light-elicited alveolar type 2-specific circadian PER2 protects from bacterial lung injury via BPIFB1. <i>Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol</i>. 2022 ;322(5):L647-L661</li> <li>2. <b>Oyama Y</b>, Bartman CM, Bonney S, Lee JS, Walker LA, Han J, Borchers CH, Buttrick PM, Aherne CM, Clendenen N, Colgan SP, Eckle T. Intense Light-Mediated Circadian Cardioprotection via Transcriptional Reprogramming of the Endothelium. <i>Cell Rep</i>. 2019;28(6):1471-1484. e11.</li> <li>3. <b>Oyama Y</b>, Iwasaka H, Koga H, Shingu C, Matsumoto S, Noguchi T. Uncoupling of peripheral and master clock gene rhythms by reversed feeding leads to an exacerbated inflammatory response after polymicrobial sepsis in mice. <i>Shock</i>. 2014;41(3):214-21.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2009年、NUTRI YOUNG INVESTIGATOR AWARD</li> </ol>

所属・職位	医学部医学科産科婦人科学（講座）・講師			
氏名	甲斐 健太郎 (KAI KENTARO)			
取得学位	博士（医学）、大分大学、2014年3月			
SDGs 目標			リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください	

研究分野	産科婦人科
研究キーワード	子宮内膜症、卵巣癌、医学教育
研究内容	<p>●子宮内膜症に関する研究 子宮内膜症は、子宮内膜組織が子宮外で生着・増殖する疾患です。思春期女性の慢性骨盤痛、生殖年齢女性の不妊症、周閉経期の卵巣癌の発生に関与します。一方で、子宮内膜組織が本来の場所ではない子宮外になぜ生着・増殖するのは不明です。我々は子宮内膜症の病因を解明すべく、研究を続けています。近年ではマイクロRNAという遺伝子発現を調整する小分子に注目し、その成果の一部を公表しました（論文1. および受賞1.）。</p> <p>●卵巣癌（卵巣神経内分泌腫瘍）に関する研究 経内分泌腫瘍は体のいたるところに発生します。しかし、その診断基準は臓器毎に異なり、診断の混乱や治療の制約が生じていました。そこで、卵巣神経内分泌腫瘍に消化管・膵臓神経内分泌腫瘍の診断基準を外挿し、その臨床病理学的妥当性を検討しました。本研究成果が神経内分泌腫瘍の診断基準の統一へつながらることが望めます（論文2.）。</p> <p>●医学教育に関する研究・活動 少子高齢化社会を迎える日本において、分娩を取り扱う産科婦人科医師の育成は喫緊の課題です。2014年から日本産科婦人科学会 未来ビジョン委員会（現 若手委員会）、2015年からは世界産婦人科専攻医連合の医員として活動しました。産科婦人科医志望の動機に関する研究（卒前）や産婦人科専攻医（卒後）の教育に関する書籍を上梓しました（論文3. および書籍1.）。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2023年、Kai K, et al. MicroRNA-210-3p Regulates Endometriotic Lesion Development by Targeting IGFBP3 in Baboons and Women with Endometriosis. <i>Reprod Sci.</i> 2023;30:2932-2944.</li> <li>2021年、Kai K, et al. Correlation of World Health Organization 2010 Classification for Gastroenteropancreatic Neuroendocrine Neoplasms with the Prognosis of Ovarian Neuroendocrine Neoplasms: Kansai Clinical Oncology Group-Protocol Review Committee/Intergroup Study. <i>Neuroendocrinology.</i> 2021;111:320-329.</li> <li>Kai K, et al. Factors affecting the recruitment of new obstetrician-gynecologists in Japan: A report of the MIRAI Committee of the Japanese Society of Obstetrics and Gynecology. <i>J Obstet Gynaecol Res.</i> 2022;48:1961-1967.</li> </ol> <p>●著書 2024年、子宮全摘術 小松 宏彰（編） 産科婦人科手術で初めて執刀する時に必ずみておく教科書 南江堂</p> <p>●受賞 2024年、大分大学医学部 産科婦人科学教室 同門会 学術症例賞</p>



所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科学講座・講師		
氏名	門脇 嘉宣 (Yoshinori Kadowaki)		
取得学位	医学博士 (耳鼻咽喉科学)、大分大学、2020年12月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください	

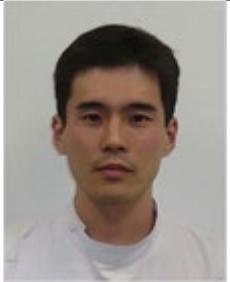
研究分野	耳鼻咽喉科学
研究キーワード	中耳炎、中耳真珠腫、耳鼻咽喉科感染症
研究内容	<p>●インフルエンザ菌による滲出性中耳炎に関する研究 小児の滲出性中耳炎や慢性閉塞性肺疾患を有する高齢者の肺炎の主たる起炎菌として、インフルエンザ菌（中でも特に無莢膜型インフルエンザ菌：NTHi）が挙げられる。このNTHiの表面にはPhosphorylcholine(ChoP)というタンパクが存在し、このタンパクがヒト粘膜上皮への接着、浸潤因子となるとされている。このChoPは発現、非発現のphase variationを起こすことが知られているが、このon-off変化の機序は明らかになっていない。我々はこの機序が明らかになれば上記疾患の難治化の解明に至るのではないかと考えている。 (論文1)。</p> <p>●中耳真珠腫に関する調査・分析 先天性真珠腫は生まれついた小児の中耳内に迷入した上皮が先天的に存在すると考えられている疾患である。進行することで中耳構造を破壊していくため、同患者はほとんどが外科的手術によって摘出や破壊された構造の再建が必要となる。これまでこの疾患の頻度は比較的稀であるとされてきつとも、他の様々な先天性疾患と違って具体的な発生頻度が論じられたことはなかった。我々はこの疾患の発生頻度について具体的数値の算出を行った。 (論文2、3)</p> <p>●扁桃周囲膿瘍の病態解明 扁桃周囲膿瘍は耳鼻咽喉科領域では最も一般的な深部膿瘍性疾患であるが、その発生機序については明らかになっていない。我々は同疾患の発症について、口蓋扁桃内の石灰化病変の有無によって異なる機序があるのではないかと考えて臨床研究を行っている（学会発表1）。今後も起炎菌や経過の相違点などについて、研究予定である。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 2021年、Phase variation with altering phosphorylcholine expression of nontypeable <i>Haemophilus influenzae</i> affects bacteria clearance and mucosal immune response in the middle ear and nasopharynx (Auris Nasus Larynx, Feb;48(1):57-64.) マウスの中耳と鼻の粘膜それぞれにChoP陽性と陰性のNTHiを投与し、それに対する細菌のクリアランスや、炎症性サイトカインや粘膜組織の炎症細胞などの免疫学的反応を測定し、それらの相違を比較検討した。</p> <p>2. 2022年、疫学的観点から見た先天性真珠腫：発生率と傾向（日耳鼻 125: 870-875. 2022）</p> <p>3. 2024年、Epidemiology of Congenital Cholesteatoma: Surveys of the Last 17 Years in Japan J. Clin. Med. 2024, 13(5), 1276 先天性真珠腫の患者はほぼ全例で外科的手術が必要になるといっても過言ではない。従ってこの疾患の有病率の算出については、患者が一つの医療機関に集約される、いわゆる地方において行う方が容易である。論文2は大分県のみで、論文3では大分県と宮崎県を合わせた研究で、それぞれ年度別の総新生児出生数と出生患者数から同疾患の発生頻度を算出した。</p> <p>●学会発表</p> <p>1. 2024年、Two types pathogenesis of peritonsillar abscess: the relationship with the calculus in the tonsil（日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会総会 国際セッション） 当科で入院加療を行った扁桃周囲膿瘍患者のCT画像において、口蓋扁桃内の石灰化病変の有無で区分したところ、各群の疫学的背景および膿瘍病巣の局在が大きく異なる結果となった。</p>

所属・職位	医学部附属病院 心臓血管外科 講師		
氏名	河島 毅之 (Takayuki Kawashima)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年6月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください	

研究分野	心臓血管外科学		
研究キーワード	心臓血管外科、再生医療、生体内組織形成術、脊髄虚血、虚血再灌流障害		
研究内容	<p>●生体内組織形成術 (iBTA)に関する研究</p> <p>生体内で移植用組織体を生成する再生医療技術である生体内組織形成術 (in body tissue architecture: iBTA) に関する研究を行っており、これまでに大動物を用いて大動脈弁用再建組織 (Biosheet)、末梢血管用グラフト (Biotube) の研究に従事してきた。現在も至適なバイパス用グラフトを有さない重症心筋虚血、重症下肢虚血症例のための小口径Biotubeの開発を進めている。</p>  <p>図. Biosheetで再建した大動脈弁</p> <p>●新たなフリーラジカルスカベンジャー Resrocimoline (RML)に関する研究</p> <p>虚血再灌流に伴い発生するフリーラジカルは様々な臓器障害に関与することが知られている。それらフリーラジカルに対して強力かつ広範囲に消去活性を有する新規抗酸化化合物であるResrocimolineに関する研究を現在金沢大学、当大学健康福祉科学部とともに共同で進めている。これまでに動物実験モデルを用いて、脊髄・心筋、下肢の虚血再灌流障害に対する予防・治療効果の研究を行ってきた。現在もその対象臓器を拡大し研究を進めている。</p> <p>●その他臨床研究</p> <p>上記基礎研究に加え、経カテーテル大動脈弁留置術やステントグラフト治療など心臓血管外科治療に関する様々な臨床研究に従事している。</p>		
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Kawashima T, <i>et al.</i> Extensive Aortic Stent Graft Coverage for Thoracoabdominal Aortic Aneurysm is Associated with Hemorrhagic Complications Induced by Disseminated Intravascular Coagulation. <i>Ann Vasc Surg.</i> 2022;78:152-160.</li> <li>2. Kawashima T, <i>et al.</i> Aortic valve neocuspidization with in-body tissue-engineered autologous membranes: preliminary results in a long-term goat model. <i>Interact CardioVasc Thorac Surg</i> 2021; 32:969-77.</li> <li>3. Kawashima T, <i>et al.</i> In vitro evaluation of the hemostatic effect of method involving the combined use of Hydrofit® and Spongel®. <i>Gen Thorac Cardiovasc Surg.</i> 2020; 68 (9) :932-937.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2018年第48回日本心臓血管外科学会総会 優秀演題最優秀賞, Hearse・山本賞</li> </ol> <p>●研究費</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 新規化合物 substance X による脊髄虚血再灌流時の脊髄保護効果の検討</li> </ol>		

所属・職位	医学部附属病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科・講師	
氏名	川野 利明 (Kawano Toshiaki)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2013年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	耳鼻咽喉科学、免疫学、感染症、ワクチン
研究キーワード	粘膜免疫、上気道感染、ウイルス学、ワクチン
研究内容	<p><b>アジュバント付加型新規鼻腔投与インフルエンザウイルスワクチンの研究</b></p> <p>現在まだ適応のないアジュバントを付加したインフルエンザウイルスワクチンを作成し、鼻腔から投与することによって粘膜免疫誘導や血清抗体産生を効果的に増加させる新たなワクチン戦略を構築する。</p> <p>(科学研究費 基盤研究(C) 令和3年～6年 M2タンパクと複合アジュバントを用いた新たなインフルエンザウイルスワクチン戦略)</p> <p>(科学研究費 基盤研究(C) 平成29年～令和1年 新規アジュバントを用いた鼻腔投与型インフルエンザウイルスワクチンの開発)</p> <p><b>Thymic stromal lymphopoietin (TSLP)を標的としたアレルギー病態と慢性感染症の制御</b></p> <p>T細胞の数と多様性の維持にはT細胞ホメオスタシスのプロセスが重要であり、その維持にはTSLPなどが関与している。TSLPとアレルギーや扁桃反復感染の関連について免疫学的評価を行い、TSLP抗体の上気道反復感染に対する有効性を検討する。</p> <p>(研究活動支援、奨学寄付、田辺三菱研究助成 令和3年 口蓋扁桃上皮に発現するTSLPを標的としたアレルギー病態と慢性感染症の制御)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022, Her2 expression can predict the survival of patients with salivary duct carcinoma, <a href="#">Kawano T</a>, Hirano T, Takakura S, Ito K, Urabe M, Tateyama K, Suzuki M, Clin Immuno Commun, 2: 149-153.</li> <li>2022, TSLP activates the production of IFN-<math>\gamma</math> via CD8-positive T cells in recurrent tonsillitis, Hiraoka K, <a href="#">Kawano T</a>, Hirano T, Fujinaga M, Kadowaki Y, Matsunaga T, Tateyama K, Kizu Y, Suzuki M, Clin Immuno Commun, 2: 98-102.</li> <li>2021, Tumor immune tissue response to a solitary fibrous tumor treated with pazopanib, <a href="#">Kawano T</a>, Hirano T, Urabe M, Tateyama K, Suzuki M, Clin Case Rep. 9:e04056.</li> <li>2020, 篠村夏織, <a href="#">川野利明</a>, 木津有美, 平野隆, 松永崇志, 吉永和弘, 立山香織, 鈴木正志, インフルエンザウイルスワクチンにおける鼻腔内アジュバントの免疫応答の検討, 日本耳鼻咽喉科感染症エアロゾル会誌, 8(3) : 1-6.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2022年、日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会、ポスター演題会長賞</li> <li>2016年、日本気管食道科学会、ポスター抄録賞</li> <li>2013年、国際耳鼻咽喉科学会、戸田SPI0奨学金</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院 整形外科・講師	
氏名	河野 正典 (Kawano Masanori)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	整形外科学
研究キーワード	骨軟部腫瘍
研究内容	<p>●骨軟部腫瘍におけるマイクロRNA発現に関する研究</p> <p>[研究論文]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Analysis of the signal cross talk via CCL26 in the tumor microenvironment in osteosarcoma. Kawano M, Iwasaki T, Itonaga I, Kubota Y, Tanaka K, Tsumura H. Sci Rep. 2021 Sep 13;11(1):18099. doi: 10.1038/s41598-021-97153-2.</li> <li>・ Interaction between human osteosarcoma and mesenchymal stem cells via an interleukin-8 signaling loop in the tumor microenvironment. Kawano M, Tanaka K, Itonaga I, Iwasaki T, Tsumura H. Cell Commun Signal. 2018 Apr 6;16(1):13. doi: 10.1186/s12964-018-0225-2.</li> <li>・ MicroRNA-181c prevents apoptosis by targeting of FAS receptor in Ewing's sarcoma cells. Kawano M, Tanaka K, Itonaga I, Iwasaki T, Tsumura H. Cancer Cell Int. 2018 Mar 12;18:37. doi: 10.1186/s12935-018-0536-9. eCollection 2018.</li> <li>・ MicroRNA-20b promotes cell proliferation via targeting of TGF-<math>\beta</math> receptor II and upregulates MYC expression in Ewing's sarcoma cells. Kawano M, Tanaka K, Itonaga I, Iwasaki T, Tsumura H. Int J Oncol. 2017 Dec;51(6):1842-1850. doi: 10.3892/ijo.2017.4155.</li> <li>・ microRNA-93 promotes cell proliferation via targeting of PTEN in Osteosarcoma cells. Kawano M, Tanaka K, Itonaga I, Ikeda S, Iwasaki T, Tsumura H. J Exp Clin Cancer Res. 2015 Aug 5;34(1):76. doi: 10.1186/s13046-015-0192-z.</li> <li>・ c-Myc Represses Tumor-Suppressive microRNAs, let-7a, miR-16 and miR-29b, and Induces Cyclin D2-Mediated Cell Proliferation in Ewing's Sarcoma Cell Line. Kawano M, Tanaka K, Itonaga I, Iwasaki T, Tsumura H. PLoS One. 2015 Sep 22;10(9):e0138560. doi: 10.1371/journal.pone.0138560. eCollection 2015.</li> <li>・ MicroRNA-301a promotes cell proliferation via PTEN targeting in Ewing's sarcoma cells. Kawano M, Tanaka K, Itonaga I, Iwasaki T, Tsumura H. Int J Oncol. 2016 Apr;48(4):1531-40. doi: 10.3892/ijo.2016.3379.</li> </ul> <p>※関連リンク : <a href="https://researchmap.jp/knz01">https://researchmap.jp/knz01</a></p>
研究業績・アピールポイント	<p>骨軟部腫瘍の遺伝子発現を調査し、発がんメカニズムを解析しています。肉腫領域のバイオマーカーおよび新規治療法の開発を目指して研究をしています。</p> <p>●受賞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第53回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会 優秀口演賞 Ewing肉腫細胞株におけるmiR-152によるCDK5発現と腫瘍増殖能の解析</li> <li>・ 第7回 大分大学医学部中塚医学賞 骨肉腫細胞におけるmiR-93によるPTEN発現抑制と腫瘍増殖能の解析</li> <li>・ Enhancement of anti-tumor effects by liquid nitrogen and dendritic cells on mouse osteosarcoma (マウス骨肉腫に対する液体窒素処理および樹状細胞による抗腫瘍効果の増強)</li> </ul> <p>日本整形外科骨軟部腫瘍学会 優秀口演演題受賞</p>

所属・職位	医学部附属病院 精神科・講師	
氏名	河野 健太郎 (Kohno Kentaro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		

研究分野	精神神経医学
研究キーワード	微量元素、飲料水、犯罪、疫学研究
研究内容	<p>●リチウムと犯罪率に関する研究</p> <p>水道水中の微量リチウムがメンタルヘルスに与える影響について、全世界で様々な研究が行われてきた。筆者らは水道水リチウムと犯罪率の関連について、九州に焦点を当てて研究を行った。その結果、水道水リチウム濃度が有意に犯罪率に影響を与えることが判明した。今後、さらに同研究を発展させていく (論文1)。</p> <p>●気質と光</p> <p>光をあびると双極性障害の病前気質である発揚気質が維持・増進されるのではないかとの仮説を検証するため、2市の住民を対象に気質の質問紙を施行した。その結果、日照量の多い市の住民の方が、日照量の少ない市の住民よりも発揚気質得点が有意に高いことを示した (論文2)。さらに2市の中間の日照量を有する市を加え、3市でさらなる調査を行った。その結果、3市において日照量が増えるごとに発揚気質得点が増加するという、量・反応関係が認められた (論文3)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>これまで上記のような研究を行ってきた。以下に論文を示す。</p> <p>●論文</p> <p>1、Lithium in drinking water and crime rates in Japan: cross-sectional study. Kentaro Kohno, Nobuyoshi Ishii, Hirohumi Hirakawa and Takeshi Terao Br J Psych Open. 2020 Oct 15;6(6):e122.</p> <p>2、Latitude effect on bipolar temperaments. Kentaro Kohno, Nobuhiko Hoaki, Takeshi Inoue, Yukiei Nakai, Atsuhito Toyomaki, Yasuo Araki, Koji Hatano, Takeshi Terao J Affective Disord. 2012 Dec 15;142(1-3):53-6.</p> <p>3、Dose-dependent effects of light on hyperthymic temperament. <u>Kentaro Kohno</u>, <u>Hajime Baba</u>, <u>Takeshi Inoue</u>, <u>Yukiei Nakai</u>, <u>Atsuhito Toyomaki</u>, <u>Toshihito Suzuki</u>, <u>Koji Hatano</u>, <u>Heii Arai</u>, <u>Takeshi Terao</u> J Affect Disord. 2014 Jun;162:26-9.</p>

所属・職位	医学部附属病院 歯科口腔外科・講師	
氏名	河野 辰行 (Kono Tatsuyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年3月	
SDGs目標		

研究分野	口腔癌
研究キーワード	口腔癌治療、頸部リンパ節転移、口腔癌検診
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口腔癌頸部リンパ節転移の画像診断と病理組織像に関する研究 口腔癌の治療成績に大きく関与する頸部リンパ節転移の早期診断を目的とした頸部超音波検査による画像評価と病理組織所見および免疫組織化学的所見の関連についての検討を行った。転移リンパ節の中には急速な増大を認める群と緩徐な増大を認める群が存在し、リンパ節の免疫組織化学的所見 (Ki-67) に相関が見られた。さらに転移リンパ節の免疫組織化学的所見と原発腫瘍の免疫組織化学的所見に相関を認め原発腫瘍の組織像から転移リンパ節の増大様式を予測できる可能性が示された。(下記論文)</li> <li>・口腔癌を含む顎骨再建治療と術後の形態回復および機能回復に関する研究 下顎骨の欠損に対して遊離腓骨皮弁を用いた下顎骨の再建を実施し、その術後の顔貌形態の回復の程度および再建に伴う機能の回復 (会話、咀嚼、嚥下) がどの程度得られているかを後ろ向きに解析し良好な機能回復を得るために必要な因子の解析を行っている。</li> <li>・大分県における口腔癌検診の実施とその有病率に関する研究 大分県の郡市において市民を対象とした口腔癌検診を実施し、口腔癌の有病者率および口腔潜在的悪性疾患の有病率について調査・解析を行っている。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>論文) Relation between proliferative activity of tumor cells and the enlargement pattern of metastatic lymph nodes in oral squamous cell carcinomas. Tatsuyuki Kono, Yoshihiro Takahashi, Kazuhiro Kawamura, Noriaki Yamamoto, Ayaka Abe, Masahiro Ohara, Kenji Kawano Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology 29(2), 116-121 2017</p>

所属・職位	医学部医学科小児科学コース（講座）・講師		
氏名	岸本 慎太郎 (Shintaro Kishimoto)		
取得学位	博士（医学）、久留米大学、2012年2月		
SDGs目標		<p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください</p>	

研究分野	小児科学
研究キーワード	川崎病、先天性心疾患
研究内容	<p><b>●川崎病急性期の熱型に関する研究</b></p> <p><b>背景：</b>川崎病急性期では発熱が10日以上つづくで冠動脈病変が発生する。ガンマグロブリン大量療法終了後24-36時間後に発熱がある患者は、ガンマグロブリン大量療法不応例とされ、冠動脈病変の発生リスクがより高くなるため、追加治療がおこなわれる。<b>目的：</b>ガンマグロブリン大量療法終了時の発熱の有無で川崎病急性期の重症度が評価できないか？。<b>方法：</b>2017～2021年に加療した川崎病急性期患者連続309人から、10病日以降に治療開始した3人を除外した306人を対象とした後方視的研究。対象患者をガンマグロブリン大量療法終了時、終了後24-36時間後の発熱の有無で4群に分け、冠動脈病変の合併率を含む臨床像を比較した。<b>結果：</b>「ガンマグロブリン大量療法終了時および終了後24-36時間後に発熱を認めた群（F-F群）」は、同じくガンマグロブリン大量療法不応例である「ガンマグロブリン大量療法終了時は解熱し終了後24-36時間後に発熱を認めた群（AF-F群）」に比べ、冠動脈病変の合併率が有意に高かった（55.3% vs 0.0%, <math>p &lt; 0.0001</math>）。<b>結語：</b>川崎病急性期患者では、ガンマグロブリン大量療法終了時の発熱の有無で重症度を推定できる可能性がある。</p> <p>（論文 Severity of Acute Kawasaki Disease Can Be Predicted by Evaluating the Body Temperature at the Completion of an Initial Immunoglobulin Treatment. Journal of Clinical Medicine 13:6985, 2024.）。</p> <p><b>●先天性心疾患患児の生活の質に関する調査・分析</b></p> <p>先天性心疾患患児の生活の質についてのアンケート調査を2025年5月から開始しています。 ※大分大学医学部倫理委員会承認番号3095-D64</p>
研究業績・アピールポイント	<p>川崎病急性期のバイオマーカーや重症度推定、先天性心疾患について研究をおこなっています。</p> <p><b>●論文</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li><u>Kishimoto S.</u>, *Suda K., Teramachi Y., Nishino H., Kudo Y., Ishii H., Iemura M., Takahashi T., Okamura H., Matsuishi T. Increased plasma type B natriuretic peptide in the acute phase of Kawasaki disease. Pediatric International 53:736-741, 2011.</li> <li><u>Kishimoto S.</u>, Fujimoto T., *Ihara K. Severity of Acute Kawasaki Disease Can Be Predicted by Evaluating the Body Temperature at the Completion of an Initial Immunoglobulin Treatment. Journal of Clinical Medicine 13:6985, 2024.</li> <li>伊藤はるか, *<u>岸本慎太郎</u>, 平江健二, 井原健二. 川崎病様症状を契機に診断した無症候性先天性右冠動脈瘻と既報のまとめ. 日本小児科学会雑誌128:1524-1530, 2024.</li> </ol>

所属・職位	医学部皮膚科学講座・講師			
氏名	酒井 貴史 (Sakai Takashi)			
取得学位	博士 (医学)、大分大学大学院医学系研究科、2015年3月			
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	 4 質の高い教育をみんなに	リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください。 	

研究分野	皮膚科学、アレルギー学、医学
------	----------------

研究キーワード	アトピー性皮膚炎、炎症性皮膚疾患、皮膚バリア機能、脂質、AIなど
---------	----------------------------------

研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● アトピー性皮膚炎：循環脂質異常の病態意義</li> <li>● アトピー性皮膚炎：角層脂質異常と皮膚バリア機能</li> <li>● アトピー性皮膚炎：合併症の予防戦略開発</li> <li>● AIによる炎症性皮膚疾患の新規治療開発および病態探索</li> <li>● 臨床課題（診療上の疑問、気づき等）から取り組む皮膚科学研究</li> </ul> ※関連リンク： <a href="https://leo-foundation.org/en/2022/12/02/award-winner-conducts-visionary-research-to-understand-the-biology-of-eczema/">https://leo-foundation.org/en/2022/12/02/award-winner-conducts-visionary-research-to-understand-the-biology-of-eczema/</a>
------	---

研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 主な論文業績           <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Sho Y<sup>†</sup>, <b>Sakai T*</b><sup>†</sup> (*: corresponding author, <sup>†</sup>: co-1st author), Sato T, Sonezaki M, Taima H, Taguchi H, Kaizu K, Nishizaka T, Takagi Y, Hatano Y. Stratum corneum ceramide profiles provide reliable indicators of remission and potential flares in atopic dermatitis. <i>J Invest Dermatol</i> 142(12):3184-3191. e7. 2022.</li> <li>2. <b>Sakai T*</b>, Herrmann N, Maintz L, Nümm TJ, Welchowski T, Claus RA, Gräler MH, Bieber T. Altered serum phospholipids in atopic dermatitis and association with clinical status. <i>JID Innov</i> 2(2): 100092, 2022.</li> <li>3. <b>Sakai T*</b>, Herrmann N, Maintz L, Nümm TJ, Welchowski T, Bieber T. Serum receptor activator of nuclear factor kappa-B ligand/osteoprotegerin ratio correlates with severity and suggests fracture's risk in older women with atopic dermatitis. <i>Allergy</i> 76(10):3220-3223, 2021.</li> <li>4. <b>Sakai T*</b>, Herrmann N, Maintz L, Nümm TJ, Welchowski T, Claus RA, Gräler MH, Bieber T. Serum sphingosine-1-phosphate is elevated in atopic dermatitis and associated with severity. <i>Allergy</i> 76(8):2592-2595, 2021.</li> <li>5. Klaeschen AS, Nümm TJ, Herrmann N, Leib N, Maintz L, <b>Sakai T</b>, Wenzel J, Bieber T. JAK1/2 inhibition impairs the development and function of inflammatory dendritic epidermal cells in atopic dermatitis. <i>J Allergy Clin Immunol</i> 147(6):2202-2212. e8, 2021.</li> <li>6. <b>Sakai T*</b>, Aoki C, Mori Y, Yamate T, Matsuda-Hirose H, Hatano Y. Site-specific microarray evaluation of spontaneous dermatitis in flaky tail mice. <i>J Invest Dermatol</i> 139(12):2554-2557. e5, 2019.</li> <li>7. <b>Sakai T</b>, Hatano Y, Matsuda-Hirose H, Zhang W, Takahashi D, Jeong SK, Elias PM, Fujiwara S. Combined Benefits of a PAR2 Inhibitor and Stratum Corneum Acidification for Murine Atopic Dermatitis. <i>J Invest Dermatol</i> 136(2):538-41, 2016.</li> <li>8. <b>Sakai T</b>, Hatano Y, Zhang W, Fujiwara S. Defective maintenance of pH of stratum corneum is correlated with preferential emergence and exacerbation of atopic-dermatitis-like dermatitis in flaky-tail mice. <i>J Dermatol Sci</i> 74: 222-8, 2014.</li> </ol> </li> <li>● 主な受賞歴           <ul style="list-style-type: none"> <li>2021年：第2回若手JSID賞（日本研究皮膚科学会）</li> <li>2022年：第6回高木賞（公益財団法人マルホ・高木皮膚科学振興財団）</li> <li>2022年：令和4年度日本皮膚科学会基礎医学研究費・資生堂寄付（日本皮膚科学会）</li> <li>2022年：LEO Foundation Award 2022 - Region Asia Pacific (LEO Foundation)</li> <li>2023年：第24回マルホ研究賞（日本研究皮膚科学会）</li> <li>2024年：令和6年度日本皮膚科学会皮膚医学研究基金・ロート製薬寄付（日本皮膚科学会）</li> </ul> </li> </ul>
---------------	--

所属・職位	医学部附属病院 災害マネジメント総合支援センター・講師		
氏名	佐藤 弘樹 (Sato Hiroki)		
取得学位	博士(医学)、東京医科大学、2019年6月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください。	
研究分野	循環器内科学 救急医学 公衆衛生学		
研究キーワード	COVID-19、急性心筋梗塞、身体活動、災害医療		
研究内容	<p>●COVID-19流行と循環器疾患・院外心停止に関する研究</p> <p>COVID-19流行と循環器疾患や院外心停止との関係について研究を行っている。COVID-19流行初期において、二次救急病院の循環器疾患関連の緊急入院患者数が流行前と比較して有意に増加したことを示した(論文1)。また、COVID-19流行初期における急性心筋梗塞患者の予後が流行前と比較して有意差がないことを明らかにした(論文2)。COVID-19流行が小児病院外心停止症例に与えた影響に関する研究にも共同研究者として参加し、COVID-19流行期には小児の院外心停止症例に対する一般市民による心臓マッサージや人工呼吸の実施率が有意に低下した一方でAED使用率が有意に上昇したことを示した(論文3)。</p> <p>●身体活動と健康増進に関する研究</p> <p>東京医科大学公衆衛生学分野と共同で、身体活動と健康増進に関する研究を行っている。東京都の小中学生を対象とした研究では、居住する地域の人口密度が低い地域だけではなく、極端に人口密度が高い地域においても1日あたり歩数が少ないことを明らかにした(論文4)。高齢者において望ましい身体活動量をアンブレラレビューによって提案した(論文5)。同研究成果は厚生労働省の「健康づくりのための身体活動・運動ガイド2023」にも引用された。</p>		
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Sato H</b>, Kondo H, Oniki T, Uraisami K, Watanabe H, Koga S, et al. Impact of the COVID-19 pandemic on acute admissions to a secondary referral hospital in a rural city in Japan: a retrospective study. <i>Disaster Med Public Health Prep.</i> 2021;22(6):1-2.</li> <li>2. <b>Sato H</b>, Yonezu K, Saito S, Abe I, Tawara K, Akioka H, et al. Impact of the COVID-19 Pandemic on the Long-Term Prognosis of Acute Myocardial Infarction in Japan. <i>Cureus.</i> 2024;16(1):e51905.</li> <li>3. Chida-Nagai A, <b>Sato H</b>, Yamazawa H, Takeda A, Yonemoto N, Tahara Y, et al. Impact of the COVID-19 pandemic on pediatric out-of-hospital cardiac arrest outcomes in Japan. <i>Sci Rep.</i> 2024;14(1):11246.</li> <li>4. <b>Sato H</b>, Inoue S, Fukushima N, Kikuchi H, Takamiya T, Tudor-Locke C, et al. Lower youth steps/day values observed at both high and low population density areas: a cross-sectional study in metropolitan Tokyo. <i>BMC Public Health.</i> 2018;18(1):1132.</li> <li>5. Fukushima N, Kikuchi H, <b>Sato H</b>, Sasaki H, Kiyohara K, Sawada S, et al. Dose-Response Relationship of Physical Activity with All-Cause Mortality among Older Adults: An Umbrella Review. <i>J Am Med Dir Assoc.</i> 25(3):417-430.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>佐藤 弘樹</b>, 市川 度. 生存時間解析がこれでわかる! 臨床統計まるごと図解. 2013年6月. 中山書店 (ISBN: 4521737153)</li> </ol>		

所属・職位	医学部附属病院検査部・講師	
氏名	篠原 徹二 (SHINOHARA TETSUJI)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2004年12月	
SDGs 目標	 	

研究分野	不整脈、洞結節機能、心臓突然死
研究キーワード	ブルガダ症候群、洞不全症候群、自律神経
研究内容	<p>心臓突然死を含めて、不整脈疾患の治療に関する研究を精力的に行っている。その中でも特発性心室 細動のJ波症候群に関する臨床研究に力を注いでいる。代表的な論文として、薬物負荷を行うことで J波症候群患者における薬物によるJ波の変動を2006年に世界で初めて報告した (Heart Rhythm 3, 1082-4, 2006)。そして、大分大学循環器内科におけるJ波症候群患者に対する薬物治療成績結果をまとめ (Heart Rhythm, 11, 1441-5, 2014)、この業績から2015年10月に第5回大分大学 医学部中塚医学賞を受賞した。その後もこれまで臨床研究を継続し、最近も以下の論文報告している。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) Shinohara T, et al. J Arrhythm. 2020; 37: 70-78.</li> <li>2) Shinohara T, et al. Ann Noninvasive Electrocardiol. 2021; 26: e12831.</li> <li>3) Shinohara T, et al. Heart Vessels. 2021;36:260-266.</li> <li>4) Shinohara T, et al. J Cardiovasc Electrophysiol. 2021;32:507-514.</li> <li>5) Shinohara T, et al. Ann Noninvasive Electrocardiol. 2022:e12937.</li> <li>6) Shinohara T, et al. Circ J. 2022;86:280-286.</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>●糖尿病モデル動物の心房細動発生におけるIfチャンネルリモデリングの役割の解明 (平成23年度～25年度科学研究費助成事業：若手研究B)</li> <li>●糖尿病における洞結節機能障害発生メカニズムの解明 (平成27年度～29年度科学研究費助成事業：基盤研究C)</li> <li>●心不全が引き起こす洞結節機能障害のメカニズム解明と新たな治療方法の開発 (平成30年度～32年(令和2年)度科学研究費助成事業：基盤研究C)</li> <li>●洞房結節線維化を引き起こす病態メカニズムの解明とその進展を予防する治療の開発 (令和3年度～令和5年度科学研究費助成事業：基盤研究C)</li> </ul>

所属・職位	医学部附属病院 高度救命救急センター・講師	
氏名	柴田 智隆 (Shibata Tomotaka)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年12月	
SDGs目標	 	

研究分野	消化器外科学 外傷学
研究キーワード	食道疾患 Acute care surgery
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 食道癌に対する低侵襲治療に関する研究 食道癌手術は開胸・開腹を伴う消化器外科領域で最も高侵襲な手術であるが、近年の内視鏡下手術の発展に伴い様々な低侵襲アプローチの開発が進んでいる。 我々は開胸を伴わないアプローチとして縦隔鏡下に食道切除を行う方法を行っており低侵襲な食道癌手術開発に取り組んでいる。(論文1)</li> <li>● 食道癌術後患者の栄養状態の調査・研究 食道癌手術は手術自体が高度な侵襲を伴うものであるのみならず、胃を管状にして再建する(胃管再建)こと、胃食道逆流防止機構を全て切除すること、により術後の栄養状態にも大きく影響する。 食道癌手術後の患者の栄養状態を評価することにより、その改善点を検討している。</li> <li>● 外傷手術教育 致死的外傷において、外科的処置は欠かせないものであるが近年その機会は著しく減少している。 外科医及び救急医に対する外傷手術トレーニングとして施設内で「外傷外科手術治療戦略コース(SSTT)」及び「献体による外傷手術臨床解剖学的研究会:C-BEST(Cadaver-based educational seminar for trauma surgery)」などのトレーニングコースを開催し外傷外科医育成に取り組んでいる。(論文2,3) ※関連リンク SSTT: <a href="https://sstt-trauma.org">https://sstt-trauma.org</a> C-BEST: <a href="http://cadaverbasedsurgicaltrainingfortrauma.kenkyuukai.jp/special/?id=30235">http://cadaverbasedsurgicaltrainingfortrauma.kenkyuukai.jp/special/?id=30235</a></li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 論文1【縦隔を覗き、さらにくり抜く-これからの食道・胃外科手術】非胸腔アプローチによる食道癌手術 新規手術手技の導入に際しての注意事項 非胸腔アプローチを開始するにあたって 柴田 智隆, 鈴木 浩輔, 錦 耕平, 衛藤 剛, 猪股 雅史 臨床外科73巻5号 Page594-597(2018.05)</li> <li>● 論文2【急性腹症に対する低侵襲アプローチ-適応と手技】緊急手術としての低侵襲アプローチ 急性腹症への応用pros&amp;cons 柴田 智隆, 河野 洋平, 平塚 孝宏, 赤木 智徳, 猪股 雅史: 外科79巻9号 Page801-804(2017.09)</li> <li>● 論文3【腹部外傷治療戦略】腹部外傷診療体制の構築をめざして 柴田 智隆, 武内 裕, 松成 修, 鍋田 祐介, 猪股 雅史, 坂本 照夫 日本腹部救急医学会雑誌 (1340-2242)39巻5号 Page855-858(2019.07)</li> </ul>

所属・職位	医学部附属病院 輸血部・講師	
氏名	高野 久仁子 (Takano Kuniko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年12月	
SDGs目標	 	

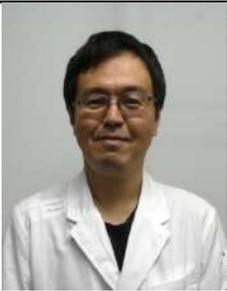
研究分野	血液内科学
研究キーワード	造血幹細胞移植、移植後HHV-6脳炎、造血幹細胞移植後合併症、移植後LTFU
研究内容	<p>● 同種造血幹細胞移植後ヒトヘルペスウイルス6(HHV-6)脳炎について、重症化に関する髄液および血漿サイトカインの動態についての検討</p> <p>同種造血幹細胞移植後の重篤な中枢神経合併症である移植後ヒトヘルペスウイルス6脳炎について、その疾患概念、診断、治療法の確立に向け世界を牽引してきた緒方正男教授のご指導の下、移植後HHV-6脳炎発症例の多くが、生着症候群をはじめとする移植後早期免疫反応に引き続き、脳炎を発症していることより高サイトカイン血症の関与について着目し、移植後HHV-6脳炎の重症化と髄液および血漿サイトカインの動態について検討を行いました。移植後HHV-6脳炎の重症化には、発症時の髄液IL-6、IL-8、および発症1週間前の血漿IL-6、IL-7、MCP-1、IL-12、髄液ウイルス量の関与が示唆され、特に、髄液IL-6、IL-8については病態形成への関与や中枢神経系の炎症の強さを反映するため、予後予測に有用なバイオマーカーとなり得ることが示唆されました(論文1)。脳炎の重症化に過剰な免疫反応が関与するならば、免疫抑制剤の強化や抗サイトカイン療法によって脳炎の重症化を抑制に繋げることができないか、が今後の研究課題である。</p> <p>● 同種造血幹細胞移植後合併症の克服のための研究</p> <p>同種造血幹細胞移植後の合併症克服のため日本造血細胞移植学会・合併症ワーキンググループに参加している。全国データを用い、移植前DMの存在が移植成績に与える影響について同種移植例9478例を対象に後方視的解析を行い、移植前の糖尿病の存在は、documented infectionの累積発症率を上昇させ、特にムーコル症の発症リスクは有意に上昇すること、移植前の糖尿病の存在は非再発死亡特に感染症死亡のリスク因子となることを明らかにし、論文発表を行なった(論文2)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. Takano K, Ogata M, Satou T, Miyazaki Y, Otsuka E, Saito N, Ueki T, Kako S, Fukuda T, Shirao K. Correlations of cytokine levels in cerebrospinal fluid and peripheral blood with outcome of HHV-6B encephalitis after hematopoietic stem cell transplantation. <i>Transpl Infect Dis</i> 21: e13172, 2019.</p> <p>2. Takano K, Fuji S, Uchida N, Ogawa H, Ohashi K, Eto T, Sakamaki H, Morishima Y, Kato K, Suzuki R, Fukuda T. Pre-transplant diabetes mellitus is a risk factor for non-relapse mortality, especially infection-related mortality, after allogeneic hematopoietic SCT. <i>Bone Marrow Transplant</i>. 50: 553-8, 2015.</p> <p>3. Takano K, Ogata M, Kawano R, Satou T, Nashimoto Y, Shirao K. Comparison of HHV-6 DNA detection in plasma and whole blood in allogeneic hematopoietic stem cell transplant recipients: frequent false-positive results for active HHV-6 infection using whole blood samples. <i>Int J Hematol</i>. 108: 535-542, 2018.</p> <p>4. Fuji S, Hirakawa T, Takano K, Doki N, Sawa M, Kanda Y, Uchida N, Ara T, Miyamoto T, Eto T, Matsuoka KI, Kawakita T, Ozawa Y, Katayama Y, Onizuka M, Fukuda T, Atsuta Y, Nakasone H. Disease-specific impact of anti-thymocyte globulin in allogeneic hematopoietic cell transplantation: a nationwide retrospective study on behalf of the JSTCT, transplant complications working group. <i>Bone Marrow Transplant</i>. Online ahead of print. PMID: 35039621, 2022 Jan.</p> <p>●著書</p> <p>緒方正男、高野久仁子、橋井佳子、植木俊光、森康雄. 造血細胞移植ガイドライン, HHV-6 (第2版) 日本造血・免疫細胞療法学会 (JSTCT)  <a href="https://www.jshct.com/uploads/files/guideline/01_03_03_hhv6_02.pdf">https://www.jshct.com/uploads/files/guideline/01_03_03_hhv6_02.pdf</a></p>

所属・職位	医学部 消化器・小児外科学講座 講師	
氏名	二宮 繁生 (Ninomiya Shigeo)	
取得学位	博士 (外科腫瘍学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	外科腫瘍学 内視鏡外科学 外科教育
研究キーワード	内視鏡外科 教育
研究内容	<p>●外科腫瘍学に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎研究として、腫瘍血管新生に関する研究を行い、学位取得した (論文1)。</li> <li>・同様に内視鏡外科における血管上皮receptorの役割について解明した (Amin AT, Ninomiya S, et al. Surg Endocs 2010)</li> </ul> <p>●消化器癌手術再建法に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・胃切除後の空腸間置再建法に関する手術成績を明らかにした (論文3)。</li> <li>・噴門側胃切除術後の新しい再建法に関する手技を報告した (Ueda Y, Ninomiya S, et al. BMC Geriatr 2022)</li> <li>・新しい胃区域切除術 (Segmental Gastrectomy) の手術成績を明らかにした (Ishikawa K, Ninomiya S, et al. World J Surg. 2007; 31(11): 2204-2207)</li> </ul> <p>●高齢者に対する手術成績に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・認知症を有する症例に対する手術成績を明らかにした (論文4)。</li> <li>・80歳以上の高齢者に対する大腸癌手術の手術成績を明らかにした (Ueda Y, Ninomiya, et al. BMC Geriatrics 2020)</li> <li>・90歳以上の手術症例の特徴と問題点を明らかにした (外科 2019; 81(7): 757-761)</li> </ul> <p>●外科教育に関する研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒前、卒後の効果的かつ質の高いトレーニング法の開発を行っている。</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Ninomiya S</b>, et al. Effect of bevacizumab, a humanized monoclonal antibody to vascular endothelial growth factor, on peritoneal metastasis of MKN-45P human gastric cancer in mice. J Surg Res. 2009; 154(2): 196-202.</li> <li>2. <b>Ninomiya S</b>, et al. Delayed perforation 10 days after endoscopic hemostasis using hemostatic forceps for a bleeding Dieulafoy lesion. Endoscopy 2013. 45: E99-100.</li> <li>3. <b>Ninomiya S</b>, et al. Feasibility and functional efficacy of distal gastrectomy with jejunal interposition for gastric cancer: a case series. Int J Surg. 2014; 12(5): 56-59.</li> <li>4. <b>Ninomiya S</b>, et al. The impact of dementia on surgical outcomes of laparoscopic cholecystectomy for symptomatic cholelithiasis and acute cholecystitis: A retrospective study. Asian J Endosc Surg 2020; 13(3): 351-358.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2024年、消化器外科専門医へのminimal requirements 第3版、メジカルビュー社</li> <li>2. 2023年、消化器外科腹腔鏡手術 免許皆伝 中外医学社 (編集)</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院 臨床薬理センター・講師	
氏名	濡木 真一 (Nureki Shinichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2005年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	呼吸器内科学	
研究キーワード	肺線維症 バイオマーカー 治療薬開発	
研究内容	<p>●特発性肺線維症の病態解明          特発性肺線維症は、進行性・不可逆性に肺線維化を来す難治性疾患である。原因は不明のものが多いが、遺伝性肺線維症の原因遺伝子であるSP-C遺伝子変異は、線維化に対する影響力が高い。SP-C遺伝子変異は、細胞の自浄作用であるオートファジーの阻害に引き続いて起こるII型肺胞上皮細胞上皮障害を引き起こす。我々は、実際の患者の遺伝子変異をマウスに組み込み、肺線維症を自然発症するsftpc<sup>173T</sup>ノックインマウスの樹立に世界で初めて成功した。現在同マウスを用いてさらなる肺線維症の病態解明を行っている。</p> <p>●特発性肺線維症のバイオマーカー探索          既存の診断・疾患活動性バイオマーカーはまだ不十分な点がある。一方、メタボローム解析は代謝物を一斉分析する技術であり、その臨床応用が急速に進んでおり、難治性疾患の新たな病態解析方法として注目を集めている。特発性肺線維症における代謝異常を同定し、診断のためのバイオマーカーを探索するとともに治療薬のターゲットを探索もしている。</p> <p>●特発性肺線維症の治療薬開発          診断確定後の平均余命はわずか2.5~5年であり、予後を改善する治療法の開発が社会から求められている。医薬基盤研究所との共同研究として官民研究開発投資拡大プログラム事業「新薬創出を加速する人工知能の開発」に参加している。九州工業大学、本学の臨床薬理学教室、薬理学教室とグループを組んで研究を行い、特発性肺線維症の治療ターゲットを見出している。現在SP-Cノックインマウス、臨床サンプルを用いて治療薬開発のための研究を継続している。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.nibiohn.go.jp/prism/works/">https://www.nibiohn.go.jp/prism/works/</a></p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文          1. Nureki SI, et al. Expression of mutant Sftpc in murine alveolar epithelia drives spontaneous lung fibrosis. J Clin Invest. 2018 Aug 31;128 (9) :4008-4024.</p> <p>●受賞          2016年 Respiration Research Retreat (Philadelphia, USA) — Best Poster Award          2018年 第58回日本呼吸器学会学術講演会 — International Session Award          2018年 日本サーファクタント・界面医学会第54回学術研究会 — Best Poster Award          2019年 第18回肺分子病態研究会 — 奨励賞          2020年 日本サーファクタント・界面医学会第56回学術研究会 — 学会奨励賞          2020年 第10回中塚医学賞</p>	

所属・職位	医学部附属病院 感染制御部・講師		
氏名	橋本 武博 (Hashimoto Takehiro)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2023年9月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください	
研究分野	感染学		
研究キーワード	重症熱性血小板減少症候群、血液培養、薬剤耐性菌		
研究内容	<p>●重症熱性血小板減少症候群の迅速診断キットの開発</p> <p>重症熱性血小板減少症候群に対する有効な抗ウイルス薬はなく、治療は血漿交換などの対症療法となる。早期に血漿交換を行うことにより予後が改善すると報告されており、重症熱性血小板減少症候群の診断を迅速に行うことは重要である。そこで致死率が高い重症熱性血小板減少症候群を早期に診断することにより、迅速な治療導入、感染対策に役立てる。</p> <p>Hashimoto T, Yahiro T, Ono K, Takenaka R, Demetria C, Khan S, Kimitsuki K, Abe R, Hiramatsu K, Nishizono A. Rapid Detection of Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome Virus in the Acute Phase of Infection by Direct Real-Time Reverse Transcription without RNA Extraction. <i>Am J Trop Med Hyg.</i> 2024 Jun 18;111(2):429-432.</p> <p>●血液培養採取に関する研究</p> <p>薬剤耐性対策として抗菌薬適正使用支援が重視されている。感染症診療において各種培養が陰性であれば速やかに抗菌薬を中止することができ、広域抗菌薬の使用量を減らすことができる。そこで血液培養の培養時間の短縮の妥当性について評価し、抗菌薬の適正使用につなげることを目的とする。</p> <p>Hashimoto T, Yahiro T, Khan S, Kimitsuki K, Nishizono A, Hiramatsu K. Validity of reducing blood culture incubation time for the BD BACTEC FX blood culture system considering microbiological and clinical aspects. <i>J Infect Chemother.</i> 2024 Sep 12:S1341-321X(24)00263-0.</p>		
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2024年、Hashimoto T, et al. Thyroid abscess associated with thyrotoxicosis caused by <i>Yersinia enterocolitica</i> subsp. <i>palaearctica</i> in a patient with follicular adenoma of the thyroid gland. <i>BMC Infect Dis.</i> 2024 Jan 8;24(1):59.</li> <li>2023年、Hashimoto T, et al. <i>Bacillus subtilis</i> Bacteremia from Gastrointestinal Perforation after Natto Ingestion, Japan. <i>Emerg Infect Dis.</i> 2023 Oct;29(10):2171-2172.</li> <li>2023年、Hashimoto T, et al. Seroprevalence kinetics of SARS-CoV-2 antibodies in pediatric patients visiting a hospital during COVID-19 pandemic in Japan. <i>J Infect Chemother.</i> 2024 Feb;30(2):169-171.</li> </ol>		

所属・職位	医学部 医学科 整形外科科学講座・講師				
氏名	平川 雅士 (Hirakawa Masashi)				
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月				
SDGs目標					リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください

研究分野	膝関節外科学、人工関節学
研究キーワード	膝関節外科、人工関節、前十字靭帯、半月板、靭帯損傷
研究内容	<p>●人工膝関節置換術における術中の問題点など3D画像を用いたシミュレーション 人工膝関節置換術は比較的安定した短期及び長期の術後成績を示しているが、患者満足度は人工股関節に比べて低り。その原因の一つとして人工関節コンポーネントと膝酷寒の不一致が存在している可能性がある。またコンポーネントを設置する際に適切な位置に設置するための指標についても3DCT画像および術前計画ソフトを用いて計測、評価を行う (論文1.)</p> <p>●アジア人向け人工膝関節の開発と臨床応用、術後の調査・分析 人工膝関節置換術の問題の一つとして、使用する人工関節のほとんどが欧米で作成されており、日本人をはじめアジア人に適合しない場合がある。我々は日本人及びタイ人の膝骨格形態のCTデータをもとにアジア人向け人工膝関節 FUTURE Knee system (帝人ナカシマメディカル社製)を開発し、日本国内で先駆けて臨床使用してきた。その経過をもとに臨床上の評価、分析を行う。</p> <p>●ロボット支援下人工膝関節の精度検証と新しい手術戦略の開発 ロボット支援下手術によって、従来法より骨切り精度の上昇、正確な軟部組織バランスの獲得が得られ、より正確な手術によって良好な術後成績が期待されている。しかしながら目標とすべきアライメントや軟部組織バランスについては今だ不明である。ロボット支援手術における詳細なデータ解析を行い、適切なアライメント、軟部組織バランスについて検証し、それをもとに適切な手術手技戦略への模索を行っていく。</p> <p>●前十字靭帯損傷、半月板損傷に関する研究 手術用デバイスの開発、臨床応用、臨床成績の評価</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>Hirakawa M</b>, Miyazaki M, Ikeda S, Matsumoto Y, Kondo M, Tsumura H. Evaluation of the rotational alignment of the tibial component in total knee arthroplasty: position prioritizing maximum coverage. Eur J Orthop Surg Traumatol 2017 Jan;27(1):119-124</li> <li>2. <b>Hirakawa M</b>, Miyazaki M, Nagashima Y, Akase H, Matsuda S, Kaku N. Asymmetric Implant Design for Posterolateral Overhang of the Femoral Component in Total Knee Arthroplasty: A Retrospective Computed Tomography-Based Study. Cureus. 2024 Mar 25;16(3):e56862.</li> <li>3. <b>Hirakawa M</b>, Miyazaki M, Sato M, Kaku N. Prediction of Distal Femoral and Posterior Articular Surfaces in Total Knee Arthroplasty With Severe Bone Defects Using Computed Tomography-Based Templating Software. Cureus. 2024 Jun 2;16(6):e61546.</li> <li>4. Akase H, <b>Hirakawa M</b>, Nagashima Y, Matsuda S, Kaku N. Posterior Aspect Fracture of Tibia after Open Wedge Distal Tuberosity Osteotomy: A Case Report. J Orthop Case Rep. 2024 Sep;14(9):81-86.</li> <li>5. Matsuda S, <b>Hirakawa M</b>, Nagashima Y, Akase H, Kaku N, Tsumura H. Exploring the extension quantities of a medial collateral ligament pie-crusting model using a finite element method. Comput Methods Biomech Biomed Engin. 2024 Feb 6:1-8.</li> </ol>



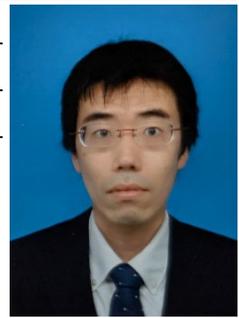
所属・職位	医学部附属病院皮膚科学・講師		
氏名	広瀬 晴奈 (Haruna Matsuda-Hirose)		
取得学位	博士(医学)、大分大学 2020年		
SDGs目標		<p>リサーチマップ (researchmap)</p> <p>※上記をクリック してください</p>	

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	アトピー性皮膚炎、皮膚免疫、Wnt/beta-cateninシグナル
研究内容	<p>①炎症性皮膚疾患の病態形成に関わる抗菌ペプチドmBD14の発現制御機構の解明</p> <p>◆組織特異的 TRAF6 欠損マウスに <i>S. aureus</i> を感染させ mBD14 誘導能を明らかにする。抗菌ペプチドmBD14 (=hBD3) の誘導メカニズムと、mBD14と皮膚炎の相関性を生体レベルで明らかにし、アトピー性皮膚炎の増悪機序に新たな知見を加えることができ、hBD3の発現を制御する皮膚局所へのサイトカイン補充療法やIL-4中和抗体投与療法が実現する可能性も期待できる。</p> <p>②Wnt/beta-catenin/CBPシグナル経路に着目したアトピー性皮膚炎の病態解明</p> <p>◆Wnt/beta-catenin/CBPシグナルの阻害剤である化合物ICG-001による湿疹惹起抑制機序の解明</p> <p>現在、アトピー性皮膚炎において次々と経口低分子化合物JAK阻害剤が認可されている。そこで、Wnt/beta-catenin/CBPシグナル経路に着目し、Wnt/beta-catenin/CBPシグナルの阻害剤である低分子化合物ICG-001を用いて解析することで、アトピー性皮膚炎の発症予防、治療の可能性が期待できる。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>Haruna Matsuda-Hirose, Tomoko Yamate, Mizuki Goto, Akira Katoh, Hiroyuki Kouji, Yuya Yamamoto, Takashi Sakai, Naoto Uemura, Takashi Kobayashi, Yutaka Hatano Selective Inhibition of <math>\beta</math>-Catenin/Co-Activator Cyclic AMP Response Element-Binding Protein-Dependent Signaling Prevents the Emergence of Hapten-Induced Atopic Dermatitis-Like Dermatitis Annals of Dermatology 31(6): 631-639, 2019.</p> <p>●国際学会</p> <p>Haruna Matsuda-Hirose, Mizuki Goto, Akira Kato, Hiroyuki Koji, Takashi Sakai, Takashi Kobayashi, Yutaka Hatano, Involvement of <math>\beta</math>-catenin/CBP-dependent signaling in the emergence of hapten-induced atopic dermatitis-like dermatitis. International Investigative Dermatology (IID) 2018 (IID 2018) 16-19 May 2018 · Rosen Shingle Creek, Orlando, Florida</p> <p>Haruna Matsuda-Hirose, Yoko Kataoka Treatment response to continuous dupilumab over time: a retrospective observational study of 123 adult atopic dermatitis patients with changes in blood biomarkers for more than 2 years 13th Georg RAJKA symposium on Atopic Dermatitis (ISAD 2023) 2023年8月 Gdansk, Pomorskie, PL</p> <p>The 13th Georg RAJKA symposium on Atopic Dermatitis (ISAD 2023)</p> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. IID2018 Travel Fellowship Award</li> <li>2. ISAD 2023 Travel Grant</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院 脳神経内科・講師	
氏名	増田 曜章 (Masuda Teruaki)	
取得学位	博士 (医学)、熊本大学、2018年3月	
SDGs目標	  	

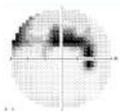
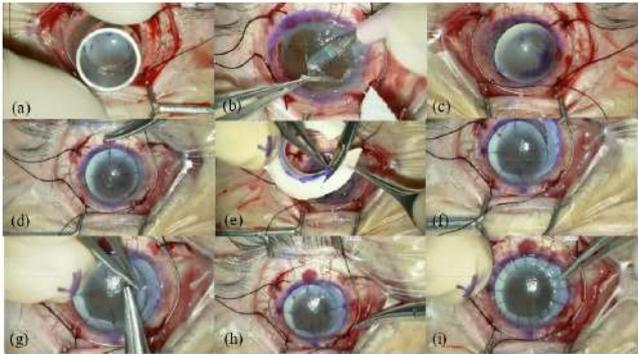
研究分野	ライフサイエンス、神経内科学、病態検査学
研究キーワード	小径線維ニューロパチー、末梢神経障害、自律神経障害、認知症
研究内容	<p>●<u>小径線維ニューロパチーの早期診断および病態評価に有用なサロゲートマーカーの確立</u></p> <p>本疾患群は、A<math>\beta</math>線維およびC線維の障害により自律神経障害や感覚障害が出現し、糖尿病、アミロイドニューロパチー、膠原病、高齢者の原因不明のしびれ (特発性) など様々な末梢神経障害に関与する。本病態は神経伝導検査など従来の検査法では、異常の検出が困難であるため適切な診断がされず可逆的な時期での早期診断および治療介入が遅れることが多い。本病態の評価法として、これまでに自身が確立し、皮神経に着目した病理学的検査法 (論文1) を上回る、さらに独自性の高い、かつ超早期診断のみならず、進行度の評価、正確な治療効果判定にも活用できるサロゲートマーカーの開発を目指す。(論文3, 4)</p> <p>●<u>自律神経障害の客観的評価法および治療法の開発</u></p> <p>自律神経系は臓器および器官の制御を行い、生体の恒常性の維持に重要な役割を果たす。様々な疾患に伴う自律神経の異常は、全身に極めて多彩な症状を引き起こし、QOLを大きく損なう。神経内科領域の疾患を中心に、病態に応じた多角的な自律神経機能検査法の開発および治療法の開発を目指す。(論文2, 著書1)</p> <p>●<u>認知症の早期診断に有用なバイオマーカーおよび治療法の開発</u></p> <p>アルツハイマー病および軽度認知障害を中心に、認知症発症リスクを予知するバイオマーカーの検索および治療法の開発を目的として、臨床研究および基礎研究を行う。(論文5)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Masuda T, Ueda M, Suenaga G, et al. Early skin denervation in hereditary and iatrogenic transthyretin amyloid neuropathy. <i>Neurology</i> 88: 2192-2197, 2017.</li> <li>Ikeda T, Masuda T, Ueda M, et al. Unwanted road to anaemia in transthyretin familial amyloid polyneuropathy may continue irrespective of tafamidis treatment. <i>Ann Clin Biochem</i> 55: 571-575, 2018.</li> <li>Masuda T, Ueda M, Kitajima M, et al. Morphology of lumbosacral dorsal root ganglia and plexus in hereditary transthyretin amyloidosis. <i>Neurology</i> 91: e1834-e1835, 2018.</li> <li>Misumi Y, Ueda M, Masuda T, et al. Characteristics of acquired transthyretin amyloidosis: A case series and review of the literature. <i>Neurology</i> 93: e1587-e1596, 2019.</li> <li>Inoue Y, Masuda T, Misumi Y, et al. Metformin attenuates vascular pathology by increasing expression of insulin-degrading enzyme in a mixed model of cerebral amyloid angiopathy and type 2 diabetes mellitus. <i>Neurosci Lett</i> 25: 762:136136, 2021.</li> </ol> <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>増田 曜章, 安東 由喜雄. 家族性アミロイドポリニューロパチーと自律神経障害. <i>自律神経</i> 55: 81-84, 2018.</li> </ol> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2018年: 日本自律神経学会 学会賞</li> <li>2018年: The XVIth International Symposium on Amyloidosis Best Poster Award</li> <li>2016年: 第69回日本自律神経学会総会 優秀演題賞</li> </ol>

所属・職位	医学部 医学科 精神神経医学講座・講師		
氏名	室長 祐彰 (Muronaga Masaaki)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2024年12月		
SDGs目標	 <p>3 すべての人に 健康と福祉を</p>	<p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください</p>	



研究分野	精神医学
研究キーワード	うつ病、双極性障害、認知症、リチウム
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・微量リチウムが認知症におよぼす影響 双極性障害の気分安定に用いる治療濃度の閾値未満の、微量なリチウムによる認知機能予防効果を調査し、水道水に含まれる微量リチウム濃度と女性のアルツハイマー型認知症有病率の間に負の相関を見出した。(論文1)</li> <li>・感情気質と糖代謝に関する脳画像研究 生まれつきの性格傾向を示す「気質」がもつ生物学的、神経的基盤をFDG-PETを用いた脳画像研究を行い、焦燥気質と左の島および右の小脳の糖代謝の間に正の相関が見られた。(論文2)</li> <li>・生活習慣と自殺念慮に関する研究 自殺予防を目的とし、日々の生活習慣と自殺念慮の関連を調査し、寝酒の量を減らすこと、青魚の摂取量を増やすことが自殺念慮を減らす可能性のあることを報告した。(論文3)</li> </ul>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <u>Muronaga M</u>, Terao T, Kohno K, Hirakawa H, Izumi T, Etoh M. Lithium in drinking water and Alzheimer's dementia: Epidemiological Findings from National Data Base of Japan. <i>Bipolar Disord.</i> 2022;24(8):788-794.</li> <li>2. <u>Muronaga M</u>, Hirakawa H, Terao T, Izumi T, Satoh M, Kohno K. Association between irritable temperament and glucose metabolism in the left insula and the right cerebellum. <i>J Psychiatr Res.</i> 2024;177:228-233.</li> <li>3. <u>Muronaga M</u>, Terao T, Hirakawa H, Kawano N, Sakai A, Akase M, Kohno K. Nightcap and suicidal ideation: a cross-sectional survey of lifestyle habits. <i>Academia Mental Health and Well-Being.</i> 2024;1(2).</li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院 眼科・講師	
氏名	横山 勝彦 (Yokoyama Katsuhiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	眼科学
研究キーワード	緑内障、角膜
研究内容	<p>研究内容</p> <p>1) 落屑緑内障発症における細胞外マトリックスと網膜表層微少循環の関与：落屑緑内障の発症および進行に眼圧非依存の因子 (TGF-<math>\beta</math> および網膜微少循環など) が含まれることを同定し、眼圧下降に依存しない新規薬物療法の開発を行う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>緑内障手術</p> <p>症例A</p> <p>眼圧が安定</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>TGF-<math>\beta</math> 濃度</p> <p>高い</p> <p>低い</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>毛細血管密度減少</p> <p>進行</p> <p>維持</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>緑内障手術後の視野障害</p> <p>視野がさらに悪化する</p> <p>視野が維持される</p> </div> </div> <p>2) 角膜疾患に対する新規外科的治療の開発：重症角膜疾患における外科的治療である角膜移植において、手術侵襲が少なく、術後の合併症を軽減するための手術方法の開発を行う。</p> 

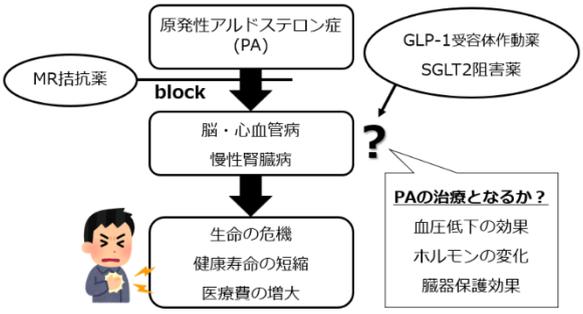
研究業績・アピールポイント	<p>研究業績：</p> <p>論文</p> <p>1) The PI3K/Akt pathway mediates the expression of type I collagen induced by TGF-<math>\beta</math> 2 in human retinal pigment epithelial cells. Yokoyama K, Kimoto K, Itoh Y, Nakatsuka K, Matsuo N, Yoshioka H, Kubota T. Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol. 250(1):15-23.2012.</p> <p>2) Deep Anterior Lamellar Keratoplasty and Peripheral Lamellar Keratoplasty for a Case of Severe Peripheral Ulcerative Keratitis. Yokoyama K, Nakamura R, Otsuka T, Kimoto K, Kubota K. Case Reports in Ophthalmology, 13:9-16 .2022.</p> <p>総説</p> <p>1) 【最新ツールで診療力アップ 緑内障診療トピック】 OCT Angiographyと緑内障 眼科グラフィック10巻3号：282-291, 2021</p>
---------------	---

所属・職位	医学部内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座・講師		
氏名	吉田 雄一 (Yoshida Yuichi)		
取得学位	博士(医学)、大分大学、2019年3月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください	

研究分野	内分泌・糖尿病内科
------	-----------

研究キーワード	内分泌、高血圧、糖尿病、肥満症
---------	-----------------

研究内容	<p>内分泌異常や肥満・糖尿病を合併する高血圧（二次性高血圧）の研究を行っている。</p> <p>●<b>原発性アルドステロン症に関する研究</b>              原発性アルドステロン症 (PA) は高頻度、かつ脳心血管イベント発症率が高い重症高血圧である。PAの治療薬であるミネラルコルチコイド受容体拮抗薬の治療効果がどのように表れるのかを研究している（論文1, 2, 3, 4）。</p> <p>●<b>肥満症に関する研究</b>              肥満外科手術は肥満関連高血圧に対して有効であるが、その効果の機序について消化管ホルモンなど内分泌的視点から研究している（論文5）。</p> <p>※関連リンク：<a href="https://www.naika1.med.oita-u.ac.jp/">https://www.naika1.med.oita-u.ac.jp/</a></p>
------	--



研究業績・アピールポイント	<p>●厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業 副腎ホルモン産生異常に関する調査研究 研究分担者</p> <p>●学会活動・学術活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本内分泌学会 副腎偶発腫ガイドライン 作成委員</li> <li>・日本内分泌学会 褐色細胞腫・パラグングリオーマ診療ガイドライン 作成協力委員</li> <li>・日本泌尿器科学会等合同 副腎腫瘍取扱い規約第4版(2024年予定) 執筆協力委員</li> <li>・日本循環器学会 重篤副作用疾患別対応マニュアル(重症高血圧) 作成班 協力委員</li> <li>・日本高血圧学会 高血圧治療ガイドライン2019, 2025 システムティックレビュー委員</li> <li>・Endocrine Society(米国内分泌学会) JCEM case reports Editorial Board</li> <li>・日本高血圧学会 Hypertension Research Editorial Board</li> <li>・Frontiers in Endocrinology Editorial Board</li> </ul> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Yoshida Y et al. Effects of esaxerenone on blood pressure, urinary albumin excretion, serum levels of NT-proBNP, and quality of life in patients with primary aldosteronism. <i>Hypertens Res.</i> 2024 Jan;47(1):157-167.</li> <li>2. Sada K*, Yoshida Y* et al. Associations of Diabetic Retinopathy Severity With High Ambulatory Blood Pressure and Suppressed Serum Renin Levels. <i>J Clin Endocrinol Metab.</i> 2023 Nov 17; 108(12): e1624-e1632. (* co-first authors)</li> <li>3. Yoshida Y et al. Importance of dietary salt restriction for patients with primary aldosteronism during treatment with mineralocorticoid receptor antagonists: The potential importance of post-treatment plasma renin levels. <i>Hypertens Res.</i> 2023 Jan;46(1):100-107.</li> <li>4. Yoshida Y et al. Quality of Life of Primary Aldosteronism Patients by Mineralocorticoid Receptor Antagonists. <i>J Endocr Soc.</i> 2021 Feb 16;5(4):bvab020.</li> <li>5. Yoshida Y et al. Effects of Sleeve Gastrectomy on Blood Pressure and the Renal Renin-Angiotensin System in Rats with Diet-Induced Obesity. <i>Obesity (Silver Spring).</i> 2019 May;27(5):785-792.</li> </ol>
---------------	---

所属・職位	医学部附属病院 臨床薬理センター・講師	
氏名	和久田 浩一 (Wakuda Hirokazu)	
取得学位	博士 (医療薬学)、静岡県立大学、2012年3月	
SDGs目標	 	

**研究分野** 臨床薬理学・薬理学・薬物動態学

**研究キーワード** PBPKモデル・ドラッグリポジショニング・メタアナリシス・P-糖タンパク質

**研究内容** 薬物動態学と基礎薬理学のバックグラウンドを持ち、それを活かして臨床薬理学の研究に取り組んでいる。現在の研究テーマは以下の3つである。

- ① **生理学的薬物速度論 (Physiologically based pharmacokinetics: PBPK) モデルによる研究**  
 Covid-19の治療薬開発を目指して、Transmembrane protease, serine 2 (TMPRSS2) の阻害薬であるナファモスタットおよびカモスタットについてPBPK解析を行った。本研究の結果は、下記の学会で発表した。(仁田脇 麻衣, 和久田 浩一, 他. 第41回 日本臨床薬理学会学術総会 2020., Wakuda H, *et al.* The American Society for Clinical Pharmacology and Therapeutics (ASCPT) Annual Meeting 2021.)
- ② **ドラッグリポジショニングの研究**  
 非アルコール性脂肪肝炎 (Nonalcoholic steatohepatitis: NASH) の治療薬は未だ無い。特発性肺線維症の治療薬にニンテダニブがある。ニンテダニブは線維化に関わるTGF-βを阻害するため、NASHの治療薬としてドラッグリポジショニングを目指して研究を行った。  
 (Wakuda H, *et al.* 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology, 2018., Susutlertpanya W, Wakuda H, *et al.* 第70回 日本薬理学会 北部会 2019.)
- ③ **メタアナリシスを用いた研究**  
 鎮痛薬であるヒドロモルフォンとオキシコドンの鎮痛効果および副作用に関してメタアナリシスにより解析した。(和久田 浩一, 他. 第4回 日本臨床薬理学会 東海・北陸地方会 2019.)

2022年1月よりUniversity of California, San Francisco(UCSF)LZ Benet教授のラボに留学中。

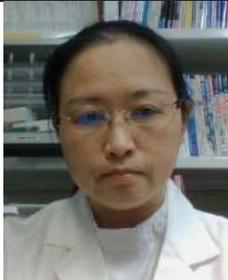
**研究業績・アピールポイント**

- ・論文
  1. Susutlertpanya W, Wakuda H, Otani N, Kuramoto T, Li L, Kuranari M, Sekiguchi A, Kudo H, Uchida T, Imai H, Uemura N. Histological evaluation of nintedanib in non-alcoholic steatohepatitis mice. *Life sciences* 228: 251-257, 2019.
  2. Otani N, Wakuda H, Imai H, Kuranari M, Ishii Y, Ito Y, Okubo A, Ogawa O, Takeda K, Ohyama T, Hasunuma T, \*Uemura N. No Effect of Digoxin on Rosuvastatin Pharmacokinetics in Healthy Subjects: Utility of Oita Combination for Clinical Drug-Drug Interaction Study. *Clinical and translational science*. 12(5): 513-518, 2019.
  3. \*Wakuda H, Okura T, Maruyama-Fumoto K, Kagota S, Ito Y, Miyauchi-Wakuda S, Otani N, Uemura N, Yamada S, Shinozuka K. Effects of Anticholinergic Drugs Used for the Therapy of Overactive Bladder on P-Glycoprotein Activity. *Biological & pharmaceutical bulletin* 42(12): 1996-2001, 2019.
- ・特許
 

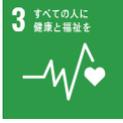
特許第7061310号 慢性脂肪性疾患の予防および治療用医薬 上村 尚人, 大谷 直由, 和久田 浩一

所属・職位	医学部附属病院 麻酔科・助教	
氏名	安部 隆国 (Abe Takakuni)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標	  	

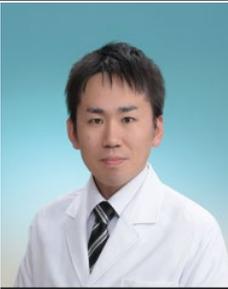
研究分野	麻酔科学、集中治療医学
研究キーワード	集中治療、急性腎傷害、腎代替療法、腎バイオマーカー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●急性腎傷害患者に対する持続的腎代替療法の終了基準の模索 重症急性腎傷害(AKI)に対する治療法として持続的腎代替療法(CRRT)が普及し、有効な治療手段として確立されているが、CRRTを終了する適切なタイミングについての研究報告は少ない。CRRTを終了すべき適切なタイミングを知ることは治療対象患者の転帰の改善のみならず医療経済面においても非常に重要な意義を持つと考えられており、CRRT施行患者における腎機能評価法を模索し、AKIに対するCRRTの適切な終了基準を明らかにすることで患者転帰の改善や医療コスト削減につなげることを研究目的としている。</p> <p>●平成29年5月 日本集中治療医学会第1回九州支部学術集会 最優秀演題賞受賞 「敗血症性急性腎傷害に対する腎代替療法の離脱基準に関する後方視的検討」</p>

所属・職位	医学部附属病院 肝疾患相談センター・助教	
氏名	荒川 光江 (Arakawa Mie)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標		

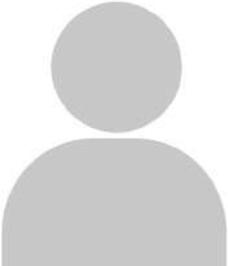
研究分野	肝疾患・自己免疫性肝障害
研究キーワード	肝炎・自己免疫性肝炎・原発性胆汁性胆管炎
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>自己免疫性肝障害の臨床研究を主にしています。 また、肝疾患相談センターでは、肝疾患診療連携拠点病院として大分県とともに肝炎・肝がん撲滅運動の仕事をさせていただいております。</p> <p>The effects of branched-chain amino acid granules on the accumulation of tissue triglycerides and uncoupling proteins in diet-induced obese mice. <i>Endocrine Journal</i> (0918-8959) 58巻3号 Page161-170 (2011.03) 先天性肝線維症に増大する限局性結節性過形成類似病変を合併した1例. <i>肝臓</i> (0451-4203) 56巻9号 Page461-468 (2015.09)</p>

所属・職位	医学部附属病院 精神科・助教	
氏名	泉 寿彦 (Izumi Toshihiko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		
研究分野	精神神経医学	
研究キーワード	気分障害、双極性障害、サングラス、非薬物療法	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>双極性障害の治療においてサングラス搔痒による抗躁効果に関する研究</p> <p>双極性障害の治療には暗室に長時間滞在する暗闇療法があるが、患者に負担が大きい。サングラスの装用により光を制限することで抗躁効果が得られる。昼間に灰色サングラスを装着することで、オレンジ色サングラスや透明サングラスよりも強い抗躁効果が発揮されるかについて研究する。</p>	

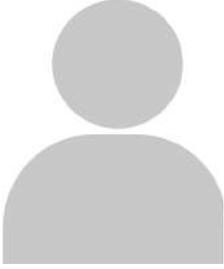
所属・職位	医学部医学科附属病院眼科・助教	
氏名	糸谷 真保 (Itotani Maho)	
取得学位	学士 (医学)、大阪医科大学、2009年3月	
SDGs目標	   	
研究分野	加齢黄班変性、網膜、緑内障、未熟児網膜症	
研究キーワード	加齢黄班変性、黄斑疾患、網膜疾患、網膜硝子体疾患、緑内障、未熟児網膜症	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・糸谷真保、大木玲子、山田喜三郎、中野聡子、久保田敏昭：6歳男児に発症した視力予後良好レーベル遺伝性視神経症の1例、神経眼科35(4)：412-417, 2018</li> <li>・糸谷真保、木許賢一、日野翔太、野田佳宏、山田喜三郎、石龍鉄樹、久保田敏昭：強い網膜下進出を来した結節性後部強膜炎の1例、日眼会誌126：27-35, 2022</li> </ul>	

所属・職位	医学附属病院 形成外科・助教	
氏名	岩本 直朗 (IWAMOTO Naoaki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		

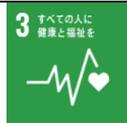
研究分野	形成外科学
研究キーワード	AI、ケロイド、肥厚性瘢痕
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●AIを用いたケロイド・肥厚性瘢痕の診断に関する研究</p> <p>一般的に、肥厚性瘢痕は傷の範囲をこえない、ケロイドは傷の範囲をこえて増大するものとされているが、中間的な病変が多々あり、典型的なものを除いては、外観で明確に区別を行うことは困難である。肥厚性瘢痕の性質が強いものは治療に反応しやすく、ケロイド的性質が強いものは治療に抵抗しやすいため、ケロイド的性質が強いものは専門施設での加療が望ましい。そこで、AIによるケロイド・肥厚性瘢痕の評価システムの開発を行っている。</p>

所属・職位	医学部附属病院 形成外科・助教	
氏名	上原 幸 (Uehara Miyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年12月	
SDGs目標		

研究分野	顔面神経麻痺治療
研究キーワード	顔面神経麻痺 人工神経 同種神経
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の臨床研究 陳旧性顔面神経麻痺に対する新しい治療法を開発している。その臨床上の有効性を前向き検討行っており、すでにその成果を国内外の学会や学会誌に報告している。</li> <li>・顔面神経麻痺における遊離筋弁移植法の基礎研究 動物モデルにて、新しい末梢神経再建手術法の開発を行っている。その人実験結果を国内外の学会論文に報告している。</li> <li>・末梢神経再建における人工神経の基礎研究 近年使用されるようになった人工神経の有効性について、動物モデルにて検討している。さらに新たな人工神経の開発を研究している。</li> <li>・末梢神経再建における人工神経と幹細胞併用法の研究 人工神経移植のみでは、今まで行っていた自家神経移植と同等の神経再生能力がないことが分かっている。現在我々は、人工神経に脱落乳歯から採取した歯髄幹細胞を移植して、これにより神経再生能力が向上するかどうかの検討を行っている。 Uehara M, Shimizu F, Wu W, Oatari M. The distal stump of the intramuscular motor branch of the obturator nerve is useful for the reconstruction of long-standing facial paralysis using a double-powered free gracilis muscle flap transfer. J Craniofac Surg 29(2): 476-481, 2017. (IF 0.788)</li> </ul>

所属・職位	医学部附属病院 皮膚科・助教	
氏名	梅木 真由子 (Umeki Mayuko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2006年3月	
SDGs目標		

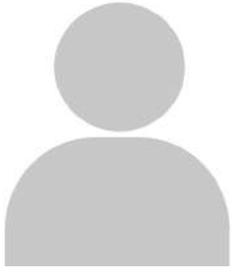
研究分野	皮膚科学
研究キーワード	皮膚悪性腫瘍
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>皮膚悪性腫瘍の診断、治療</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;">図3 SMM 鑑別アルゴリズム(案)</p> </div> <div style="width: 50%;"> <p>爪下悪性黒色腫は他の悪性黒色腫に比べて生命予後が悪いことが知られている。その要因として、初期病変の爪甲色素線条についての良悪の鑑別が困難であることが挙げられる。我々は、当科で経験した症例をもとに、爪甲色素線条における悪性黒色腫の鑑別アルゴリズム案を作成した。</p> <p>図引用：西日本皮膚科 72巻2号 Page101-105 (2010. 04)</p> </div> </div>

所属・職位	医学部附属病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科・助教	
名	梅本 真吾 (Umemoto Shingo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	粘膜免疫学
研究キーワード	粘膜ワクチン、経鼻ワクチン、RSウイルス、肺炎球菌、インフルエンザ菌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>● 粘膜免疫・粘膜ワクチンに関する研究</p> <p>局所粘膜免疫を介した免疫は、抗原特異的な免疫応答を全身系のみならず粘膜局所にも誘導可能であることが知られている。しかしながら、粘膜ワクチンについて臨床応用がなされているのはごく一部に限られている。</p> <p>私はこれまで新しい経鼻ワクチンデリバリーシステムを用いた上気道病原菌（肺炎球菌、インフルエンザ菌）に対するワクチンの研究に携わっており、現在はRSウイルスに対する経鼻ワクチンの研究、および広く腸管まで含めた粘膜免疫の研究をすすめている。</p> <p>My Bibliography:  <a href="https://www.ncbi.nlm.nih.gov/myncbi/1RkmR5sWassQ9g/bibliography/public/">https://www.ncbi.nlm.nih.gov/myncbi/1RkmR5sWassQ9g/bibliography/public/</a></p>

所属・職位	医学部附属病院 脳神経外科・助教	
氏名	大西 晃平 (Oonishi Kouhei)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2011年3月	
SDGs目標		

研究分野	脳神経外科学
研究キーワード	脳腫瘍、脳血管障害、脊髄外科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容：脳腫瘍の分子生物学と臨床への応用</p> <p>これまでの研究では脳腫瘍の増殖や血管新生とフリーラジカル的一种である一酸化窒素の合成酵素(Nitric oxide synthase : NOS)との関連、NOS阻害剤の増殖抑制効果を報告したものは散見されるが、臨床的意義や治療へ発展性を明確にするには至っていない。実際に、様々な悪性度の脳腫瘍患者の組織で、酸化ストレスの関連や腫瘍予後への影響を検討する。</p> <p>研究業績：Onishi K, Kamida T, Momii Y, Abe T, Fujiki M. The clinical and pathological significance of nitric oxide synthase in human pituitary adenomas: a comparison with MIB-1. <i>Endocrine</i>. 46(1): 154-9, 2014</p>

所属・職位	医学部附属病院 産科婦人科・助教	
氏名	岡本 真実子 (Okamoto Mamiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		

研究分野	医学
研究キーワード	子宮内膜症、マイクロRNA、生殖医学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●子宮内膜症において発現が減少しているmiR-199a-3pの役割に関する研究</p> <p>子宮内膜症病変は、月経周期に伴って出血、凝血、吸収を繰り返して瘢痕化し、病態が進行する。これまでの研究から、子宮内膜症の病態形成におけるエピジェネティクス異常の役割が注目されているが、その詳細なメカニズムに関しては未だ不明な点が多い。</p> <p>本研究では、以前に我々が子宮内膜症細胞において発現が減少していることを報告したマイクロRNAに着目し、① 子宮内膜症におけるマイクロRNAの標的遺伝子の網羅的解析、② 網羅的解析によって見出された候補遺伝子の役割に関する分子生物学的および細胞生物学的検討、③ マイクロRNA標的遺伝子を制御する薬剤の子宮内膜症治療薬としての有用性についての検討を行う。</p>

所属・職位	医学部附属病院 消化器内科・助教	
氏名	小川 竜 (Ogawa Ryo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年12月	
SDGs目標		

研究分野	医学 消化器内科学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ、食道アカラシアなど
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>ヘリコバクター・ピロリに関する研究</p> <p>Ogawa R, Okimoto T, Kodama M, Togo K, Fukuda K, Okamoto K, Mizukami K, Murakami K. Changes in Gastric Mucosal Glycosylation Before and After Helicobacter pylori Eradication Using Lectin Microarray Analysis. Turk J Gastroenterol. 2022 Feb;33(2):88-94.</p> <p>食道アカラシアに関する研究</p> <p>Shiwaku H, Sato H, Shimamura Y, Abe H, Shiota J, Sato C, Ominami M, Sakae H, Hata Y, Fukuda H, Ogawa R, Nakamura J, Tatsuta T, Ikebuchi Y, Yokomichi H, Hasegawa S, Inoue H. Risk factors and long-term course of gastroesophageal reflux disease after peroral endoscopic myotomy: A large-scale multicenter cohort study in Japan. Endoscopy. 2022 Feb 16.</p>

所属・職位	医学部 内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座 助教	
氏名	尾関 良則 (Ozeki Yoshinori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標		

研究分野	内分泌代謝学
研究キーワード	肥満症、内分泌、糖尿病
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●肥満症治療前後における糖尿病をはじめとする代謝疾患の改善と体組成および内分泌変化の関連について研究を行っている(論文1-4)。</p> <p>●アルドステロン測定における新規検査法の解析を行い、原発性アルドステロン症の新ガイドラインに関わる報告を行った(論文5,6)。</p> <p><b>【研究業績】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>Ozeki Y, Masaki T, Shibata H, et al. Nutrients 2018; 10(10): 1456.</li> <li>Ozeki Y, Masaki T, Shibata H, et al. Endocr J 2019; 66(7): 605-613.</li> <li>Ozeki Y, Masaki T, Shibata H, et al. Medicines (Basel) 2022; 9: 47.</li> <li>Ozeki Y, Masaki T, Shibata H, et al. Nutrients 2024; 16(22): 3926.</li> <li>Ozeki Y, Shibata H, et al. Diagnostics (Basel). 2021; 11(3): 433.</li> <li>Ozeki Y, Shibata H, et al. Front Endocrinol (Lausanne). 2022; 13: 859347.</li> </ol>

# 医学部附属病院

所属・職位	医学部附属病院 手術部・助教	
氏名	甲斐 真也 (Kai Shinya)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2006年3月	
SDGs 目標		

研究分野	麻酔学
研究キーワード	バランス麻酔
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>各種麻酔薬や鎮痛薬の一部には、臓器保護効果があることが示されている。しかしながら実際の麻酔においては、麻酔薬や鎮痛薬の組み合わせ、適切な麻酔深度を維持することで麻酔を行っており、これらを組み合わせることでの有効性について検討した報告は少ない。そこで、我々は吸入麻酔薬、麻薬性鎮痛薬の各種組み合わせによる臓器保護効果の有無について、肝虚血再灌流障害モデルを使用し検討を行っている。</p>

所属・職位	医学部 腎泌尿器外科学講座・助教	
氏名	甲斐 博宜 (Kai Hironori)	
取得学位	修士 (医学部)	
SDGs 目標	 	

研究分野	泌尿器化学
研究キーワード	再生医療
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●再生医療を見据えた外尿道括約筋の機能解析</p> <p>当教室では、これまでに外尿道括約筋の幹細胞である衛星細胞の分離培養・長寿化法などを確立した。今後も尿失禁の病態解明、さらには再生医療への応用へ向けた研究を推進する</p>

所属・職位	医学部附属病院 整形外科・助教	
氏名	金崎 彰三 (Kanezaki Shozo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	整形外科学
研究キーワード	整形外科外傷、骨盤骨折、寛骨臼骨折、骨癒合
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ラット大腿骨モデルを用いたテリパラチドとBMPの相乗効果に関する研究          確率されたラット大腿骨骨折モデルを用いて、BMP-2単独よりもPTHを併用することで骨形成を促進させることを示した。(J Orthop Surg Res, 14(1): 403, 2019)</p> <p>●寛骨臼骨折手術におけるinfra-acetabular screwの挿入経路に関する研究          CTデータを用いて日本人におけるinfra-acetabular screwの挿入経路の大きさなど特徴について検討した。約3割の患者ではinfra-acetabular screwを挿入するのに十分な経路がないことを示した。(Arch Orthop Trauma Surg, 140(3): 359-364, 2020)</p> <p>以上のように主にラットを用いた骨形成に関する基礎研究も行いながら、骨盤・寛骨臼骨折に関する臨床研究も行っています。</p>

所属・職位	医学部附属病院 脳神経外科・助教	
氏名	川崎 ゆかり (Kawasaki Yukari)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2004年3月	
SDGs目標		

研究分野	脳神経外科学
研究キーワード	theta burst stimulation, long-term potentiation, neurobehavior, subarachnoid hemorrhage, motor-evoked potential
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>顕著な現代医学の進歩にもかかわらず、既存の方法では異常を同定・評価できないものの一つに神経学的無症候・潜在的病態がある。客観的評価が困難であるため、無症候性病態はその影に潜む加療を要する重大な病態を見逃す恐れを有する一方、その数は激増の一途をたどる。この問題は本病態の臨床的評価指標を待たずして客観的評価指標の観点からその大きな糸口を掴むことができる可能性があり、くも膜下出血後の症候性脳血管攣縮予測可否検討を行っている。くも膜下出血において発現する脳保護・可塑性誘導に有効な遺伝子が発現する条件と同一の刺激条件が、臨床上也同様な脳の再教育効果を有するか否かを、神経生理学的手法で評価・解析する。</p>

所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座・助教			
氏名	木津 有美 (Kizu Yumi)			
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2014年3月			
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください		

研究分野	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学、免疫・アレルギー学
研究キーワード	ウイルス、ワクチン
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>複数アジュバントを用いた新規インフルエンザワクチンの開発</p> <p>インフルエンザワクチンは次年度の流行予想を行い推奨株が決定される。予想と異なった株型が流行した場合有効性が低下するが、インフルエンザウイルスワクチンには、異なる株型においても中和抗体を産生するクロスプロテクションという効果がある。(Laurie K.L et al, J Infect Dis, 2018)。ウイルス表面のヘマグルチニン(HA)やノイラミニダーゼが、現在のインフルエンザウイルスワクチンターゲットであるが、より普遍的で広範なクロスプロテクション効果をもつウイルスのM2タンパク(M2)をワクチンとして用いることとした(下図)。より有効で安全性の高いインフルエンザウイルスワクチンの確立は、世界中のインフルエンザウイルス感染患者のパブリックヘルスに貢献できると考えられる。</p>

所属・職位	医学部附属病院 歯科口腔外科・助教			
氏名	栗林 佳奈 (Kuribayashi Kana)			
取得学位	学士 (歯学)、福岡歯科大学、2012年3月			
SDGs目標				

研究分野	歯学
研究キーワード	口腔外科、口腔内科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容： 骨吸収抑制薬関連顎骨壊死の治療に関する臨床的検討 口腔顎顔面の発育異常とその治療</p> <p>研究業績： 薬剤関連顎骨壊死の治療に関する臨床的検討。 第83回日本口腔外科学会九州地方会 抜歯窩に骨壊死または治癒遅延を生じたBP内服患者の2症例。 第24回日本口腔内科学会・第27回日本口腔診断学会 大分大学医学部附属病院の口唇口蓋裂診療体制と過去33年間の臨床統計。 第43回日本口蓋裂学会総会・学術集会</p>

所属・職位	医学部附属病院 集中治療部・助教	
氏名	栗林 由英 (Kuribayashi Yoshihide)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標		

研究分野	麻酔科学, 集中治療医学
研究キーワード	せん妄, 酸化ストレス
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>「周術期における酸化ストレスと術後せん妄の関連」についての研究 ・敗血症と酸化ストレスの関連性, 一般外科術後と酸化ストレスの関連性について臨床 ) 研究継続中である.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>「<math>\beta</math>遮断薬ランジオロール塩酸塩の抗酸化能—電子スピン共鳴法/ TBARS分析による in vitro/ex vivoラジカル消去能の測定—」 日本麻酔科学会第63回学術集会 (2016年) で発表</li> <li>「心臓血管外科手術における術後せん妄と酸化ストレスの関連」日本麻酔科学会第65回学術集会 (2018年) で発表</li> <li>「心臓・大血管疾患に対する待機的手術における術後譫妄とビタミンCの関連/—電子スピン共鳴装置を用いた検討—」 日本麻酔科学会第68回学術集会 (2021年) で発表</li> <li>「待機的心臓・大血管手術における高齢者術後譫妄には酸化ストレスが関与する/—電子スピン共鳴装置を用いた検討—」 第33回日本老年麻酔学会 (2021年) で発表, <u>優秀演題賞受賞</u></li> </ol>

所属・職位	医学部附属病院 麻酔科・助教	
氏名	小坂 麻里子 (Kosaka Mariko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	 <div style="display: inline-block; vertical-align: top; margin-left: 20px;"> <p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください</p>  </div>	

研究分野	麻酔科学
研究キーワード	炎症 麻酔
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・緑色波長光照射による血小板シグナルを介した肺保護効果の検討 本研究は、マウス敗血症モデルに対して光治療を行った際に、血小板関連因子が抗炎症効果に与える影響について検討することを目的としている。我々はこれまでの実験で、自然光を模したLED光照射が照度依存性に抗炎症効果を有し、肺傷害を軽減することを見出した。また、各種波長光を用いて同様の光照射実験を行い、緑色波長光で炎症性サイトカインの抑制と抗炎症サイトカインの増加を認め、光依存性に変動した遺伝子のうち約40%が血小板関連遺伝子であることを発見した。現在、盲腸結紮穿孔 (CLP) による敗血症モデルを作成し、緑色LED光の肺保護効果と上記血小板関連遺伝子の関連、および役割について検討を行っている。</p>

所属・職位	医学部附属病院 医療情報部・助教	
氏名	後藤 芳美 (Gotou Yoshimi)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	17 パートナリシップで目標を達成しよう 	

研究分野	医療情報学
研究キーワード	電子カルテ、病院情報システム、看護
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>主に電子カルテで蓄積した情報を用いて、病院職員からの要求を元に業者では開発できないニッチなシステムを研究し、日本医療情報学会にて発表している。</p> <p>看護管理に有用な情報を提供するシステムの構築に関する研究</p> <p>看護業務の数量化の探索</p> <p>DWHを用いた看護業務の可視化の検討</p> <p>業務量調査結果との比較による評価</p> <p>看護師の忙しさの要因を追求するシステムの開発</p> <p>看護必要度C項目評価のための情報収集機能の開発</p> <p>電子カルテを用いたPNSワークシートの構築</p> <p>ケアプロセスの可視化 (第一報)</p> <p>転倒転落アセスメントスコアとベッドマップ機能の融合システムの構築</p> <p>看護必要度C項目評価のための情報収集機能の開発</p> <p>出棟チェック機能を用いた患者所在一覧化の検討</p> <p>病床管理業務のためのサポートツールの構築</p> <p>薬剤部門の電子カルテ情報収集のための自作システム開発</p> <p>病院内部署の個別運用業務に応える自作システムとその評価</p>

所属・職位	医学部附属病院 小児科・助教	
氏名	小林 修 (Kobayashi Osamu)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標	3 すべての人に健康と福祉を 	

研究分野	小児神経学
研究キーワード	神経発達症、早期発見、General Movements、自発運動
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●乳児早期の自発運動評価と神経発達症の早期発見に関する研究</p> <p>神経発達症の早期発見を目的としています。乳児早期のGeneral Movementsという自発運動と、神経発達症との関連性がないかの評価を行います。一般健診を受ける3-4か月時の乳児の自発運動をビデオで評価し、その結果と1歳半、3歳半、5歳時の質問紙や健診結果から、神経発達症の徴候との関連性の検討を行います。</p>

所属・職位	医学部麻酔科学講座 助教		
氏名	小林 朋暉 (KOBAYASHI Tomoki)		
取得学位	学士(医学)、大分大学、2018年3月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください	

研究分野	麻酔科学、集中治療医学
研究キーワード	麻酔、集中治療、急性腎障害
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●急性腎障害の急性期から回復期の病態を表すmiRNAバイオマーカーの創出</p> <p>急性腎障害(acute kidney injury: AKI)は、集中治療患者において高頻度に合併し、短期及び長期予後に重大な影響を及ぼす。AKIの早期診断においては複数のバイオマーカーが研究されているが、いずれも確立されたものではなく、腎機能の回復過程におけるバイオマーカーに至っては臨床応用されたものは存在しない。AKI患者において急性期や回復期に特異的に変化するmiRNAを、網羅的に解析する。新しいmiRNAが見出されれば、AKI患者の早期診断、腎予後予測、および血液浄化療法の離脱基準の明確化につながる。</p>

所属・職位	医学部附属病院 循環器内科・助教		
氏名	近藤 秀和		
取得学位	博士(医学)、大分大学、2015年8月		
SDGs目標			

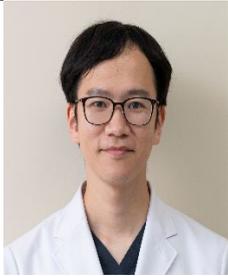
研究分野	循環器内科学
研究キーワード	心房細動、心外膜脂肪、SGLT2阻害薬
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>#1. 心外膜脂肪の遺伝子発現プロファイルに対するSGLT2阻害薬の効果</p> <p>イギリス留学時にSGLT2阻害薬の心筋redoxへの直接効果を検証した研究をもとに、現在はSGLT2阻害薬の心外膜脂肪への効果を追究している。留学時に培ったヒト組織からの細胞培養法を駆使しより臨床に近いヒト検体を用いた実験にこだわって研究を進めている。</p> <p>#2. 術後心房細動予防のための心外膜脂肪中新規標的因子の解明</p> <p>心臓血管外科とコラボレーションし、術後心房細動患者の心外膜脂肪組織で特異的に発現亢進している因子を同定しようとしている。</p> <p>#3. デバイス植込み患者の患者背景・予後と皮下脂肪組織・骨格筋組織の遺伝子発現プロファイルの関係</p> <p>業績詳細は<a href="https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/?term=kondo+hidekazu&amp;sort=date">https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/?term=kondo+hidekazu&amp;sort=date</a>へ</p>

所属・職位	医学部附属病院 高度救急救命センター（循環器内科）・助教	
氏名	齋藤 聖多郎 (Saito Shotaro)	
取得学位	博士（医学）、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	循環器内科学
研究キーワード	心不全, 糖尿病, 肥満, 心房細動, 心筋虚血再灌流障害, 心筋症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・糖尿病ラットにおける血糖変動と心房筋線維化増悪, 心房細動易誘発性に関する研究 (Saito S, Takahashi N, et al. Glucose fluctuations increase the incidence of atrial fibrillation in diabetic rats. Cardiovasc Res. 2014 Oct 1;104(1):5-14.).</li> <li>・糖尿病ラットにおける血糖変動と心筋虚血再灌流障害増悪に関する研究 (Saito S, Takahashi N, et al. Glucose Fluctuations Aggravate Cardiac Susceptibility to Ischemia/Reperfusion Injury by Modulating MicroRNAs Expression. Circ J. 2016;80(1):186-95.).</li> <li>・ヒト心外膜脂肪中の炎症性サイトカイン含量と隣接する心房筋線維化との関わり (Abe I, Saito S, Takahashi N, et al. Association of fibrotic remodeling and cytokines/chemokines content in epicardial adipose tissue with atrial myocardial fibrosis in patients with atrial fibrillation. Heart Rhythm. 2018 Nov;15(11):1717-1727.).</li> </ul>

所属・職位	医学部 消化器小児外科学講座 助教	
氏名	部 由貴 (SHITOMI YUKI)	
取得学位	医学博士、大分大学、2017年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	消化器外科学
研究キーワード	上部消化管
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>タイトル：縦隔鏡下食道癌手術における経胃的空腸瘻の周術期および長期栄養管理の有用性の検討</p> <p>概要：食道癌術後の経腸栄養管理に関する実践的かつ最適な方法選択の指針を決定することを目的として、縦隔鏡下食道癌手術におけるERASの有用性を評価し、低侵襲手術の特徴が周術期管理に与える影響について評価する。また経腸栄養留置方法（経胃的空腸瘻と空腸瘻）の比較を通じて術後合併症率や栄養状態の改善における相違点を明らかにし、長期留置経腸栄養が食道癌予後および患者の生活の質に及ぼす影響について調査する。</p> <p>助成金：公益財団法人大分がん研究振興財団</p> <p>関連論文：食道切除胸骨後経路胃管再建における経胃管的経腸栄養カテーテル留置術の検討（大分県医学会雑誌 2024年3月）</p>

所属・職位	医学部医学科呼吸器・感染症内科学講座・助教			
氏名	首藤 久之 (Shuto Hisayuki)			
取得学位	博士 (医学)			
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください		

研究分野	呼吸器学、感染症学
研究キーワード	DPC研究、抗酸菌症、SFTS、呼吸器感染症
研究内容・研究業績・アピールポイント	リアルワールドデータ (DPCデータなど) を用いた臨床研究等 ① Shuto H, et al. Comparison of High-Dose versus Low-Dose Trimethoprim-Sulfamethoxazole for Treating Pneumocystis jirovecii Pneumonia among Hemodialysis Patients: A Nationwide Database Study in Japan. J Clin Med. 2024 Sep 14;13(18):5463 ② Shuto H, et al. Carbapenem vs. non-carbapenem antibiotics for ventilator-associated pneumonia: A systematic review with meta-analysis. Respir Investig. 2024 Jan 7;62(2):200-205. ③ Shuto H, et al. Corticosteroid Therapy for Patients With Severe Fever With Thrombocytopenia Syndrome: A Nationwide Propensity Score-Matched Study in Japan. Open Forum Infect Dis. 2023 Aug 1;10(8):ofad418. ④ Shuto H, et al. Efficacy and safety of fluoroquinolone-containing regimens in treating pulmonary Mycobacterium avium complex disease: A propensity score analysis. PLoS One. 2020 Jul 9;15(7):e0235797.

所属・職位	医学部医学科 腎泌尿器外科学講座・助教			
氏名	鈴木 駿太郎 (SUZUKI Shuntaro)			
取得学位				
SDGs目標				

研究分野	泌尿器科学
研究キーワード	前立腺、精嚢腺、オルガノイド
研究内容・研究業績・アピールポイント	前立腺や精嚢腺の分泌機構の解析を行なっています。

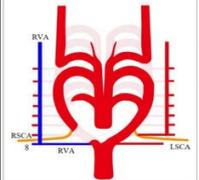
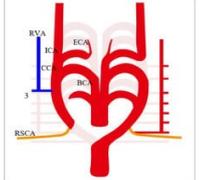
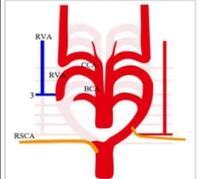
所属・職位	医学部附属病院 脳神経内科・助教		
氏名	竹丸 誠 (Takemaru Makoto)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2018年6月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください	

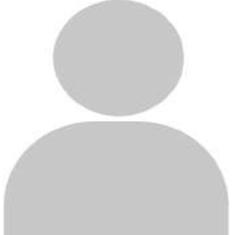
研究分野	脳神経内科学
研究キーワード	脳卒中、認知症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●脳卒中(主に虚血性脳卒中)についての臨床データ解析</p> <p>①可逆性脳血管攣縮症候群11症例の臨床的検討, 臨床神経学 2018;58:377-384</p> <p>②Clinical features and efficacy of reperfusion therapy in minor ischemic stroke patients with atrial fibrillation, J Thromb Thrombolysis. 2020 Oct;50(3):608-613.</p> <p>●認知症の画像解析</p> <p>① The evaluation of brain perfusion SPECT using an easy Z-score imaging system in the mild cognitive impairment subjects with brain amyloid-<math>\beta</math> deposition, Clin Neurol Neurosurg. 2017 Sep;160:111-115.</p>

所属・職位	医学部附属病院 薬剤部・助教		
氏名	田代 渉 (Tashiro Sho)		
取得学位	博士 (薬学)、慶應義塾大学、2023年3月		
SDGs目標			

研究分野	医療薬学、薬物動態学、抗菌化学療法学
研究キーワード	Pharmacokinetics/pharmacodynamics (PK/PD)、抗菌薬、薬物動態、耐性菌、メタ解析
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>多剤耐性菌感染症に対するPK/PD理論に基づく抗菌薬の有効性評価</b></p> <p>世界の大きな脅威となっている多剤耐性菌に対して、感染マウスモデルを用いた抗菌薬のPK/PD評価を実施した。最適なPK/PDパラメータ値を決定することで、科学的根拠に基づく抗菌薬の用法用量設定や最小発育阻止濃度breakpointの設定に寄与した。</p> <p>Tashiro S. et al. <i>Pharmaceutical Research</i> 2021; 38 (1): 27-35.</p> <p>Tashiro S. et al. <i>Clinical Microbiology and Infection</i> 2023; 29 (5): 616-622.</p> <p><b>システマティックレビュー&amp;メタ解析による抗菌薬の有効性および安全性評価</b></p> <p>感染症治療薬の有効性と安全性を臨床試験データからメタ解析を実施し評価することで、臨床現場における科学的根拠に基づく抗菌薬選択に貢献した。</p> <p>Tashiro S. et al. <i>Journal of Infection and Chemotherapy</i> 2022; 28 (11): 1536-1545.</p> <p>Tashiro S. et al. <i>European Journal of Pediatrics</i> 2023; 182 (6): 2673-2681.</p> <p>ORCID ID: <a href="https://orcid.org/0000-0001-7616-4990">https://orcid.org/0000-0001-7616-4990</a></p>

所属・職位	医学部附属病院放射線科・助教	
氏名	徳山 耕平 (Kohei TOKUYAMA)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年12月	
SDGs目標	16 平和と公正をすべての人に 	

研究分野	放射線医学
研究キーワード	解剖、硬膜動静脈瘻、放射線治療、画像診断
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●右椎骨動脈の発生に関する論文</p> <p>右椎骨動脈はいくつかのvariationを有することが知られている。本論文では発生の観点から右椎骨動脈のvariationが生じる機序について考察を行い、reviewを行った。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>※関連リンク：<a href="https://www.mdpi.com/2076-3417/11/17/8171">https://www.mdpi.com/2076-3417/11/17/8171</a></p>

所属・職位	医学部附属病院 検査部・助教	
氏名	中田 知里 (Nakada Chisato)	
取得学位	博士 (生命科学)、鳥取大学、2004年3月	
SDGs目標	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="margin-right: 10px;">  </div> <div style="margin-right: 10px;">  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">             リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください           </div> <div style="margin-left: 10px;">  </div> </div>	

研究分野	分子病理学
研究キーワード	腎細胞癌、microRNA
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●腎臓明細胞癌で異常発現するmicroRNA、miR-210の機能解析</p> <p>腎がんのおよそ7割を占める腎臓明細胞癌では、VHL-HIF経路が脱制御されており、これが発がん、悪性化に関わっていると考えられています。miR-210はVHL-HIF経路の制御を受けて腎臓で異常発現しており、この機能解析により、発がん、悪性化のメカニズムを明らかにし、新規治療法の開発につなげたいと考えています。</p> <p>●代表論文 #:共同筆頭著者、* ; 責任著者</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Nakada C*, Moriyama M* et al. J Pathol 2020;251:12-25.</li> <li>2) Matsuo M#, Nakada C#, Tsukamoto Y* et al. Mol Cancer 2013;12:15.</li> <li>3) Tsukamoto Y#, Nakada C#, Moriyama M* et al. Cancer Res 2010;70:2339-2349.</li> <li>4) Nakada C, Moriyama M* et al. J Pathol 2011;224:280-288</li> <li>5) Nakada C, Moriyama M* et al. J Pathol 2008;216:418-427.</li> </ol> <p>●受賞</p> <p>第2回中塚医学賞、第11回中塚医学賞 2021年度武田科学振興財団 医学系研究助成 (医学系・基礎)</p>

所属・職位	医学部附属病院 眼科・助教	
氏名	中野 聡子 (Nakano Satoko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		

研究分野	眼科学
研究キーワード	眼感染症、PCR
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>眼感染症多項目PCR検査薬の創出と普及がテーマである。</p> <p>I 新しい眼感染症多項目PCR検査薬の創出          核酸精製不要・検体直接PCR、マルチプレックス・リアルタイムPCR、凍結乾燥・固相化技術で構成された多項目PCR検査薬を創出した (Ophthalmology, 2020)。</p> <p>II PCR適応の体系化          海外を含む多施設研究 (約1200例) にて、各感染症の病原体コピー数の分布を解明し、眼感染症PCR検査の適切な使用法を体系化した (Am J Ophthalmol, 2019)。</p> <p>III 眼感染症PCR需要調査・先進医療・外注検査の導入支援          全国調査 (高瀬, 中野ら, 日眼会誌, 2019) を実施し、全国100施設超に普及させた。</p> <p>IV 橋渡し研究・保険診療化の働きかけ          アカデミアでPMDA対応、臨床性能試験を準備し、保険診療化を目指している。</p>

所属・職位	医学部附属病院 腫瘍内科・助教	
氏名	西川 和男 (Nishikawa Kazuo)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	腫瘍内科学
研究キーワード	癌治療、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1) A multicentre retrospective study comparing site-specific treatment with empiric treatment for unfavourable subset of cancer of unknown primary site. Jpn J Clin Oncol. 2022 Dec 5;52(12):1416-1422.</p>

所属・職位	医学部附属病院 循環器内科・助教	
氏名	福井 暁 (Fukui Akira)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年3月	
SDGs目標		

研究分野	医学
研究キーワード	不整脈、心房細動、心房線維化、心不全
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>循環器内科の中でも、主に不整脈学を研究しています。</p> <p>基礎研究では、アディポサイトカインであるレプチンが炎症を介して心房線維化が進行することや (Circ Arrhythm Electrophysiol. 2013; 6:402-9.)、肥満による高レプチン血症が心房線維化を進行させることを発見しました (J Cardiovasc Electrophysiol. 2017; 28:702-710.)。現在も線維化進行のメカニズムについて研究しています (科研研究課題 20K20225)。</p> <p>臨床研究では、心房細動に対するカテーテルアブレーションが、心収縮能が保たれた心不全 (Heart Failure with Preserved Ejection Fraction, HFpEF) 患者の再入院を減少させることを世界で初めて報告しました (J Cardiovasc Electrophysiol. 2020; 31:682-688.)。</p> <p>今後も、基礎研究および臨床研究を通じて、社会の発展に貢献できればと思います。</p>

所属・職位	医学部附属病院高度救命救急センター (整形外科)・助教	
氏名	日野 瑛太 (Hino Akihiro)	
取得学位	学士 (医学)、自治医科大学、2010年3月	
SDGs目標		

研究分野	整形外科学
研究キーワード	整形外科学、骨盤脆弱性骨折
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>骨盤脆弱性骨折は2013年にRommensらによって提唱された比較的新しい概念です。高齢化社会に伴い高齢者の脆弱性骨折が増加していく中、骨盤脆弱性骨折も見落としてはならない疾患の一つと考えられます。当院は大分県内で骨盤骨折の手術を実施可能な数少ない医療機関であり、骨盤脆弱性骨折に対する予防、手術療法、経過、予後などの研究を進め今後の医療に貢献できればと思います。</p> <p>●2023年 受傷から1か月以上経過して手術を行った骨盤脆弱性骨折の術後ADLの回復 第49回日本骨折治療学会学術集会 学会発表</p>

所属・職位	医学部 附属病院 腎泌尿器外科学講座・助教	
氏名	藤浪 弘行 (Fujinami Hiroyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年9月	
SDGs目標		

研究分野	泌尿器科学
研究キーワード	前立腺癌、RNA代謝異常、RNAリン酸化
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●前立腺癌とRNA代謝異常に関する研究</p> <p>RNAの5'末端をリン酸化する酵素であるRNAキナーゼが腫瘍形成に及ぼす影響を解析することにより、RNAの代謝異常が腫瘍形成にどのように寄与するかを明らかにし、RNA代謝制御機構の調節を標的とする新たな治療戦略を構築することを目的とする研究。</p> <p>●研究業績</p> <p>2015年4月より大分大学医学部大学院医学系研究科大学院博士課程(社会人大学院)に入学し、基礎研究を開始し、2020年2月に学位論文であるGLP1 acts as the main RNA kinase in mice. (業績1, Biochem Biophys Res Commun. 2020 Feb 17: S0006-291X(20)30334-X.)を発表し、2020年9月に博士課程を修了し、大分大学医学部大学院医学系研究科を卒業し、医学博士号を取得した。本研究の研究内容については、2019年9月第92回日本生化学会大会において「RNA kinase links cancer progression」という演題で途中経過について学会発表を行った。また、2020年3月第97回日本生理学会大会においても「RNA kinase links prostate cancer progression」という演題で発表する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大のため集会中止となり、誌上開催となった。</p>

所属・職位	医学部附属病院高度救命救急センター (消化器・小児外科) ・助教	
氏名	二日市 琢良 (Futsukaichi Takuro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		

研究分野	救急学
研究キーワード	外傷診療、蘇生的外科手術、トレーニングコース
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●外傷診療トレーニングに関する研究</p> <p>重症外傷患者に対する診療は時間・情報の制約のもとで生理学的徴候を評価し、直ちに介入することにより『防ぎえた外傷死』に至らないことを目標とする。大量出血を伴う症例では救急外来で蘇生的開胸・開腹術などの外科治療を必要とするが、近年の非手術治療の発達および低侵襲外科手術の進歩により開胸・開腹術を経験する頻度は激減している。特に若手医師が開胸もしくは開腹手術を経験する頻度は著明に減少しており、重症外傷診療を行う外科医および救急医に対して実臨床に直結したトレーニングコースの構築が必要である。</p> <p>本研究においては、大分県下の外傷診療に携わる外科医および救急医を対象とし、まず現在の外傷診療能力の評価を行い、その後に当施設で開催している外傷診療トレーニングコースを受講することによる診療能力向上について評価を行う。さらにそれらのコースの特徴を最大限に活かしてコースの最適化もしくは新コースの立案を行い、最終的に重症外傷手術に携わる外科医および救急医のレベルアップする事により重症外傷患者の救命率向上を目指す。</p>

所属・職位	医学部附属病院血液内科・助教	
氏名	本田 周平	
取得学位	学士（医学）、大分大学、2010年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	血液内科学
研究キーワード	血液内科、血液悪性腫瘍、同種造血幹細胞移植、感染症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>【研究内容】</b> 血液悪性疾患では原疾患および治療（化学療法）に伴うストレス、副作用により患者は2重の負担を背負うこととなります。 化学療法に伴う感染症管理の開発を通してより安全な治療法を開発を目指します。 また、近年社会全体の高齢化に伴い高齢患者への適切な治療戦略を開発することも急務となっています。高齢患者における化学療法の効果と副作用の評価を行い最適な治療計画の確立を目標としています。</p> <p><b>【研究業績】</b> ●High-throughput simultaneous quantification of five azole anti-fungal agents and one active metabolite in human plasma using ultra-high-performance liquid chromatography coupled to tandem mass spectrometry. Tanaka R, Shiraiwa K, Takano K, Ogata M, Honda S, Yoshida N, Okuhiro K, Yoshida M, Narahara K, Kai M, Tatsuta R, Itoh H. Clin Biochem 2022 Jan;99:87-96.</p>

所属・職位	医学部 歯科口腔外科学講座・助教	
氏名	前城 学 (MAESHIRO MANABU)	
取得学位	博士（医学）、熊本大学、2021年10月	
SDGs目標	 <div style="display: inline-block; vertical-align: top; margin-left: 20px;"> <p>リサーチマップ (<a href="#">researchmap</a>) ※上記をクリックしてください</p> </div> 	

研究分野	外科系歯学
研究キーワード	CTCs, DTCs, CTC cluster, 浸潤・転移
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><b>血中循環腫瘍細胞の力覚応答に基づくクローン選択メカニズムの解明と治療法の開発</b> 原発巣から循環腫瘍細胞（circulating tumor cells: CTCs）として遠隔臓器に播種し生着した癌細胞（disseminated tumor cells: DTCs）は、一定の期間、休眠状態で潜伏し、転移巣形成のシードとなる。 頭頸部扁平上皮癌（HNSCC）の転移性休眠を再現するマウスモデルに高解像度トラッキング法を応用することで、特定の癌細胞集団のみが血中の流体剪断応力に適応可能な CTC クラスターを形成することで DTCs を占拠することを見出し、個々の癌細胞の力覚応答性がクローン選択に寄与している可能性を世界に先駆けて報告した (Maeshiro et al. Sci Rep 2021)。この知見に基づき、CTC クラスターの形成とその高度転移能を支える分子基盤を力覚応答の観点から解明し、新たな癌の診断・治療戦略を創出することを目指す。</p>

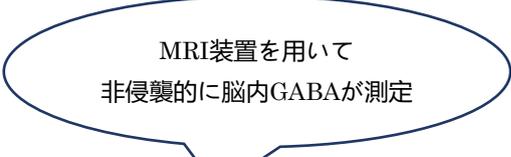
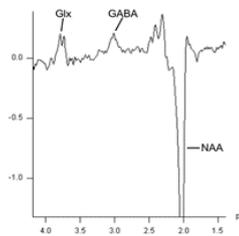
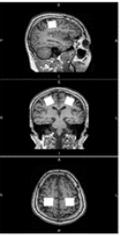
所属・職位	医学部附属病院 小児科・助教	
氏名	前田 美和子 (Maeda Miwako)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、1995年3月	
SDGs目標		

研究分野	小児内分泌学
研究キーワード	肥満、脂質異常
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●小児の肥満と脂質異常の長期免学調査研究</p> <p>大分市の小児生活習慣病予防検診のデータを用いて、小学5年生の肥満発生率や脂質異常の発生率を解析し、小児期からの生活習慣病予防対策を検討しています。</p> <p>(関連する論文 Secular Trends in Obesity and Serum Lipid Values among Children in Oita City, Japan, during a 27-Year Period. Maeda M, Maeda T, Ihara K. J Atheroscler Thromb. 2022 Jan 29. doi: 10.5551/jat.63056. Online ahead of print. PMID: 35095055)</p>

所属・職位	医学部附属病院 消化器外科・助教	
氏名	増田 崇 (Masuda Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	肝胆膵外科
研究キーワード	肝胆膵外科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>(研究実績) 2008年4月より大分大学大学院医学系研究科博士課程に進み、肝胆膵外科・肥満外科に関する基礎的研究に取り組んできた。肝臓外科手術の際に重篤な合併症を引き起こす可能性のある虚血再灌流障害に関する研究を行い、学位を取得した。学位取得後は、肝臓癌や肝臓外科に関する臨床的研究を行い、学会報告を行ってきた。現在、今回成果を発表する全国規模の多施設共同研究を主導的に行っている。</p> <p>(診療実績) 津久見中央病院、大分赤十字病院、別府医療センターなどの地域の基幹病院にて、外科全般の診療を行ってきた。現在は大分大学消化器・小児外科助教として、肝胆膵外科に従事している。肝胆膵外科学会高度技能医、内視鏡外科技術認定医を取得し、高難度肝胆膵外科手術や肝胆膵内視鏡外科手術を行っている。</p>

所属・職位	医学部附属病院医療情報部・助教	
氏名	松田 浩幸 (Matsuta Hiroiyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2023年3月	
SDGs目標		

研究分野	神経画像解析、臨床てんかん学 (てんかん外科)、脳神経外科学、医療情報	
研究キーワード	fMRI、MRS、Neuromodulation、IGT	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●MRSを用いた非侵襲的神経伝達物質濃度測定による脳機能研究 MR分光分析法の特殊な撮影解析により通常検出できないGABAの検出が行える実験環境を構築した。これを用いた脳機能研究や、経頭蓋磁気刺激によるニューロモデュレーションのメカニズムの研究、てんかん等の中枢神経疾患の病態に関する研究を行っている。</p> <p>Continuous theta-burst stimulation to the sensorimotor cortex affects contralateral gamma-aminobutyric acid level and resting-statenetworks. (Plos One. Matsuta H 2022)</p> <p>●大分県てんかん医療地域連携体制整備事業 てんかん支援拠点病院として地域連携体制整備を行う。</p>	
	<div style="text-align: center;">  </div> <div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center;">   </div>	

所属・職位	医学部附属病院医療安全管理部・助教	
氏名	松本 紘幸 (Matsumoto Hiroiyuki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	呼吸器内科	
研究キーワード	呼吸器感染症、抗酸菌感染症	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●活動性肺結核患者における胸部単純X線所見陰性例の割合と特徴に関する研究 活動性肺結核における胸部単純X線所見陰性例の割合を調査し、その症例の特徴や背景について検討した (Matsumoto et al. Infect Dis. 2020;52(7):520-523)。</p> <p>●痰検体における基質特異性拡張型β-ラクタマーゼ (ESBL) 産生菌検出症例の特徴に関する研究 痰検体におけるESBL産生菌検出症例の割合を調査し、その患者の特徴や背景について検討した (Matsumoto et al. Intern Med. 2023;62(14):2043-2050)。</p>	

所属・職位	医学部附属病院 救急医学 助教		
氏名	松本 祐欣 (MATSUMOTO YUKI)		
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2018年3月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください	

研究分野	救急医学、集中治療医学
研究キーワード	敗血症、腎代替療法
研究内容・研究業績・アピールポイント	

所属・職位	医学部附属病院 脳神経外科・助教		
氏名	勅井 泰朋 (Momii Yasutomo)		
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2007年9月		
SDGs目標			

研究分野	脳腫瘍
研究キーワード	悪性神経膠腫、PET検査、画像診断
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>PETでの画像解析と組織学的解析を併用した遺伝子プロファイルの可能性</p> <p>脳腫瘍における画像診断及び治療については未だ、有益、有効なものは少ない。そこで新たな画像診断と、それを利用した腫瘍の特性を探ることで、新たな治療を導き出すことを主眼においた研究である。またPET検査の利用価値を上げることで、未だ、保険適応外であるメチオニンPETや低酸素PET等の保険適応を得ることで、多くの患者に負担にならない検査となるよう図っていく。</p>

所属・職位	医学部附属病院 脳神経外科・助教	
氏名	森重 真毅 (Morishige Masaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		

研究分野	脳神経外科
研究キーワード	脳血管障害 脳卒中 脳動静脈奇形 血管新生 分子細胞生物学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容：脳血管奇形における細胞内シグナルの解析</p> <p>血管の発生には血管内皮前駆細胞からのvasculogenesisのメカニズムと、血管内皮細胞の形成 (angiogenesis) の過程があり、さらにvascular remodelingが加わる。脳血管奇形の形成にはこれらの異常が関与し、遺伝的要因を背景に、微小環境（低酸素環境、外傷、炎症、感染等）に導かれる血管新生、免疫細胞の集積、ストローマ細胞の活性化などといったことが考えられている。脳血管奇形における分子メカニズムは不明な点が多く、特異的な細胞内シグナルを解明することで、治療困難な脳血管奇形の病勢把握や新たな治療開発に寄与する。また、血管新生の理解は、もやもや病や脳梗塞といった虚血性脳疾患においても非常に重要な知見となる。</p>